源氏物語講義

末摘花

帝國圖書館藏

末摘花

此巻源の年立、朔月より、十七歳の春より、翌る年のまさぞ丙とあり、とるハ、玉小櫛の説より除て、十八歳の二月より、十九歳の正月までのとくとべし、

段落

此巻ハ、一大段五小段とし、一小段より於てハ、大輔の命婦の系図を、末摘花の系図をならハして、源の始て懸想ふるふ状を叙し、二小段より於てハ、三条の大殿のさま、源氏命婦を責て末摘花を見るふ状を叙し、三小段より於てハ、源末摘花より逢のふ

末摘花の巻　凡一大段五小段三十四節

此巻ハ。源氏十八歳の春より。十九歳の春までの。ことを。ものがたる。巻の名ハ。歌并詞をとりて付たるなり。詞ハ五小段の末五節より。「はなのもとつむ花いとまほひやうよさしいでたり」とあり。歌ハ五小段の末二節より。「なつかしきそこともなくしよりなるく氏末摘花を神にふれ々ん」とあり。紅の花ハ末ようさけバ。末より摘まそうて。末摘ふといふを。この常陸の宮乃ゆむすめハ。鼻あのきまゝまてあとくていくるゝ。この巻ハ。夕貝の巻の文脈を直ようけたる書ざ法まして。ゆ源の前のとより。同巻の後のことと近よるゝ。横竪をこゝ。旧注より。竪の義とし。さてこゝを。旧注より。横の義とし。たり。といいそれ。なるゝ。義とふ。おるゝ。義とふ。けるゝ。ゝ下皆さることく知るべし。

思へどもなほあるざるゝ夕ぞなの。蓬のよおくれ。福の。ほ。ゝ。年月ふれどおぼもつるそれぞ。さくもの。ゝ。

帝國圖書館藏

ことゝ朱雀院行幸の御支度のことを叙し、四小段に於てハ源末摘を嫌ひ給ふ状、雪の夜末摘を訪ひ給ふことを叙し、五小段に於てハ末摘より源へ御贈物あり、源よりも物ありし事を叙し、結尾に源自ら鼻に紅を付て紫上と戯れ給ふさまをかけり。若紫巻の文脈をも受けて、合せて此大段を結べるなり

眼目 此物語、源のまめ〳〵しきにして、たとへらんにかなへども人に表をかけ給ふハ、つねの御心なれバ、末摘花

うちとけぬかぎりのけしきばみ。心ふかきかたの（夕顔のこと）御いどましさに。けぢかくうちとけしあはれに。にるものなうこひしくおぼえ給ふ。「冒頭之詞ニ思へども猶あかざりし」とかき出したるハ、夕顔の巻の文脈をうけたるなり。その巻に思ひ忘るゝ文法之○思へども猶あかざりし」源氏ノ思フナレドモヤハリ飽ズアリシと也○露におくれし」引歌なし。花鳥に信明集時雨はげしく折〳〵のうつるとも露におくれし」引歌なくとも聞ゆる也○年月ふれど」夕顔のうせ給へるハ去年なれバ年月をへても源の忘れ給はぬ也○思しも忘れず」○ここもかしこも」何方ノ寄ニテモ○うちとけぬかぎりのけしきばみ」俗ハリアヒタサニ之○けしきばみ心ふかきかたの御いどましさに」打解ぬほどのやうすをみせて心ふかきをいふ○けぢかくうちとけしあはれ」馴付てあはれし夕顔のあはれなるに之○にるものなうこひしくおぼえ給ふ」似る者なく悪暴（ギヤウ）ひ思はれ給ふと也。源の御心を叙せるなり。
いかで。ことごとしきおぼえハなく。いとらうたげならん

のぬきも却て捨給ふハぬえさえ末摘ハ今は孤（ミナシゴ）となりて居給ふなれど、父宮の在世のかげもなく衰へたる状を、眼目としてかきたり。そハ一小段の第二節に入りてより、同第四節にいたりて同第八節に到りて、いとゞおもひのたゞまた二しをれ給ひたるは、小段の第二節にふりまたるありとて、三たるを、おきの同第七小段の第一節にあれ節にそひおくれ給ふめいたるに、四小段の第一節に木丁などいたくそこなはれたる

人のつましきとなからん、見つけてしがな。とこりずまにおぼしわたれバ。すこしゆゑづきて聞ゆるわたりハ、御耳とゞめ給はぬくまなきに。さてもやとおぼしよるばかりのけはひあるあたりにこそハ。ひとくだりをもほのめかし給ふめるに。なびききこえずもてはなれたるハをさ〳〵あるまじきぞいとめなれたるや。つれなう心づよきハ。たとしへなうなさけおくるゝまめやかさなど。あまりもののほどしらぬやうにさてしもすぐしはてず。なごりなくくづをれて。なほ〳〵しきかたに

由緒（カタモナキニ） 源の 気色（ケシキ） 程（ホド） 浅く（ウスクツカハシ） 女之 止ミユル 文などやる 薄 其余（ヨ） 言ハヾ（イハヾ） 情（ナサケ） 容貌 身分ノ程（ホド） 手有（テアリ） 屈 折 尋常のこと

同第二節よりひきらべ、そ
けたるよ、同第二節
よあれたるさまハ、同
ゐよりふくとの里と
たりて、同第四節よりい
いたらみたる、又くろ
きうちき、五小段の第
一節ハもりのよこだ
いなる、同第二節よりつ
やなうふるめきたる、
同第五節よりあれた
れバ又ようなうふる
めきたる、などあるハ
皆末摘の貧しきさま
をもめせるまゝて、眼目
とおもふべし、

照應

此巻の照應ハ、一小段
の第二節よりこゝろの
朧月夜よりとあるを第

夫の宣ふ
さぐまりなどせるもあれば。のぞひさしつるもお
ほのうけり　一小段の第一節。源氏夜の物語を見知
さまゝ。末摘花をゑんなるよ仮案。いうぞ」俗ドウゾシテ。いとらうらうしげなるらん」雨夜の巻より蓬の門よりゐひのほのよ
らうらうしげならん人のゑ」とうゝゝれを見いでさそこの蓬の
門なるゝ〜タ白のとも見ゆ〜ゆるさまゝ。帚木巻夕白巻より思
ひせる文法。てまゝきことるうらん」世よつゝみ悔るることあるき
人をゑ付たきとゝ。よ末摘のつまゝ〜げるさまとゑ第して
照應せり。こゝとゝ」引ふゝ。孟津よりぎをよまゝ〜もな
きゑハたちぬゞ〜くよりぬ世よ〜をはつゝ」とゑ。ゝハタ
白の上れとのさまゝ〜の物見ひよ牲こうゝ〜て。ゑ見おれ〜やうな
るゝをもとめるゝとゝ。そこ〜ゆゑづきて」ゆ〜もよ〜ありて人
のまゝ〜きこゝゝハといふゝ。源のこゝよ從ゞのゝぬ
いゝ。をきゝ」專ゝたうゝとゝ。いとめるれたるや」めるれいゝ剣
まそいつゝもさゝとゝ。地ようゝ伴ていふゝ。つれるうゝんづまきゝ。
も〜源よるゝびのぬハゝ。情おくゝ」あまり実なるゝのゝぎそ
るきけのこゝハおくゝもくゝとゝ。さそ〜もくゝゝそゝゝ」実なるゝん
だそをなゝ〜とゝげぬゝ。なゝどりなくゝづをれて」餘波ゝもなくゝんをく

三節よ物のきをむべ
き夜のさまよゝ」とう
けて、第八節よりつ
きそ立のくれのゝを」と
ゑハ、源と中将との月
のあはのそとちめ又第
三節よいざよひの
月をゝ〜きほどよ」と
ある八第八節よ中将
のあはそいざよひの
月」とうけて、次よ月ゝ
をゝ〜き行よゝ〜
大殿よおそ〜ぬ」とゝ
小段の文を結べるそ、
皆照應ゝ又三小段よ
てハ第一節よ八月ゝよ
日ゝ〜まゝ〜る月の
ゝもとるき」とかき出
して月やう〜出ぬ」と
うけ第五節よ萩ゝあ

さらかゝ〜てゝ〜のゝひさ〜つるもおほのうゝり」ゝハ女の方よて
源のきひてゝのゝふゝのとゝ方御よゝさもきけれバ他の男よ送ふゝとゝ。
空蟬のの巻ゝの照應ゝ
あの宮蜻をもの〜をゝ〜ゝをゝ〜まハぬゝうおぼ〜いづ。
萩の葉もさうぬべきゝ風のたようあるときゝ。おどろ
ヅレ
ゝ〜ゝのふをうもあるべ〜。ほのげのこゝぶれたりし
さ面ハ。ソノ時ノヤウニ
まゝ〜さやうゝて〜こゝまゝ〜ほ〜くおぼ〜ゝ。源の性
をゝゝ大の八源ハあとゝゝもゝくゝ物忘れハきるゝハぬ性をとゝ
ゝゝ名殊たるき物ゝゝ
大輔命婦の継母ゝ
左衛ゝのめれとゝて。大貳のあまのさ〜つぎよおぼ
ぼ〜ゝとゝゝまゝ
いたるおむ〜め大輔の命ぬゝそうちよさふらぬゝ
。大輔の命婦ハ甚好色の人ゝ
おむどほりの兵アれ大輔なるおむ〜めなりけ
ゝいとゝゝいろごのめるゝの人ゝてありける

う知のぬ」とあり、又四小段ノそハ才二節よ書かきたれいらごうふりけり」とゑて前載の雪をゑゆゑ」雪の光りよ」才三節よ雪もづすーくちろうて」才五節よ松の雪のこあたくあげよふりつめるきとこぼるく雪才こつ節よ雪よあひてもくけまもとひ」ゑどある旨は段の照応ゑるをたゑてまゑりて、源のふりよけるかーらの雪をえるへ也」のゑすて弦びたり」他一小段才二節よ」の空悼をゑ」とゑて、五小段才一節よあの空悼のうちとけゑ

を。源ゆめ一つのひなどーのふ。大補命婦の実母ゑたくぜんのあこれ妻ゑてくぐうよけれバ。ちく兵ア大補ゑのもと紙里さこゑてけかよ」。こひうちのみこれ毛ゑより末摘ゑのこをいふ文法の入題ゑゑゑよまうけて。いうこうじ大切よ書ふゑうかーづき弦ひーはもひ末摘ゑめこいろぼいそくてのこういいいいる弦くくいいを命婦源へゆゑとつついでよゑうゑ夢ゑ通けれバ。源何あたれのこやヨとそ女のやうゑを問ゆふゑ。心やひきくゆふ。命婦何ゑ末摘の心と容ゑゑおくくこうちなどふのきこうふえ恵エウりえべらぎ。みカキヒリマセん

いひそめ。◎◎◎◎◎末摘のさ侍ゑとうゑてゑーーゑへバ。さべきサルベキ宵ゑ隔て命婦末摘と語ゑゑよひゑるど。物ごーーよてぞこうこらひ侍ゑる。琴きんをぞなゑ末摘ハ琴を終夕の友ゑとーゑふゑつゑきこうこうらひくくとおもひ弦へゑるとゆゆれバ。

アーーゑ」とあるハ、ゑ蟬の巻の照応ゑ。して、二小段才五節のうらハやゑうようづらひゆひ」と四小段才一節のゆのはふのゆのりだつねとうゑ弦ひそ」とあを結尾よゑりて、源とはふ」と蟬れ遊びのふ秋ゑて弦べるハゑはふの巻の照応ゑゑ二小段才五節よのきぬくゑの雪もみくよつきて」とあるハ、夕皇の巻の照応ゑ。ばゑゑはあるハもこころどこころよりゑべー、

一小ノ才二節

源の方へ蟬を云」ばの旨地の旨ゑ〇風のた

源何

ゑ川のとゑもて。酒ハ女よ伝ゑーーうゑ。ばやあーんとゑいまひくくさうやうゑてあらん。

よ源ゑ少せよ。父光隆ゑちくみこのさやうのゑうよ。いとよーづきてものーー弦ひけれだ。末摘ゑ大うゑまあーード上手おーーゑてのゑづゑ

ひよはあらーじと思ふ。とゑのくうこひ弦ふ。命婦何さーんと源の思ゑ源の源ゑのゑーーほどゑハあるゑゑ車下ーーて云ゑこーめたゑこのりゑハ侍らばやあらんといへバ。源何甚キドリガマシイヨとゑ

うゑ命婦ゑ。ーーやこのはの朧ハ月夜よきのびてものせん。ゆゑでよとのくうゑへバ。命婦ゑメンドウナうづらふーーとおもへどうちうくうゑものどやゑなるゑるれつ彩ゑタイクッよ末摘の方へゑ。内裏ゑゆゑのゑ。源ゑゑゑの宣悼軒ゑの萩の

ゑれ。とあぼーーゑふゑゑ。ゑ才一節二節よ。源夕皇のゑ絵思ひ。雨夜物語のとゑるどおぼーーゑて。さて多悼軒ゑの萩ゑど

より」荻の枝への縁語にていふ之、と便のある時々之○ほのかげの云ふ云ふと斯ぞと碁打志時のことく灯のかげまへのひしことをいふ之○こゝの比の朧月夜」ハこれ下の第三節八節に照応し○志のびてものせん」源君で末摘の方へいらんと之○まゐでゝは」命婦ももと時なりさとの方へなれと源のすゝめ之○うちとりもなしに」禁中のさまも閑暇なる春此時節にて、たれくつなるまゝに源ハ夕暮より末摘の方へとまゐらるゝ之

までおぼし出るハ、うちとけて語らふべき女もおほかりと志るきりにおぼれさ侍まで。末摘花をかき出されべき由の伏案之○○左衛門のめのとて」是より大輔の命婦の系図をいふ之○大弐のあまのさしつぎ云ふ」大弐の尼ハ惟光が母、源の乳母之○此尼につぎて源が大切に思ひし左衛門の乳母お女（ムスメ）の大輔の命婦といふ之○わかむどほりの兵部の大輔」河海に王家（ワカ）無等（ムトホ）論王孫を云ふ之とありて此人ハ王孫にて兵部の大輔になりたる之此人ハ大輔の命婦の実父之○むすめハちくぜんのかみの妻にて」命婦の実母之。兵部の大輔を離別して今ハ筑前守の妻となりて国へ下りてあるを之○君ひとりのみや」是より大輔の命婦が彼方へ常にまゐる便にて源に侍へゆく之。末摘花の父君ハ常陸の大守なれてましたりしが故常陸皇子（ヒタチノミコ）と云ふ之○こゝろぼそくてのこりゐ給へるを」三小段の第一節に照応し。末摘ハ既に父君うせ給ひし後ハ心細く住すみかを之○みやへのこちそらし」命婦の詞之。人のおくれたるかたハかくしてよきことをいふハ命婦の源をおこしたてめ之○かいひそめ」かいハ例の源ていふ詞之ひそめハ潜之○ひとつうとうと」人跡之。人に馴しなめぬ之○らいのともにて」琴詩酒なるべし。白楽天北窓の三友といひしとあり○きんのあせよ」源その末摘が琴を弾ずるを夜にかせよと之○ちくみこのもとに」常陸宮ハ琴の上手にておはせしを云ふ女なればよく上手なるべしと源ののたまふ之

一小ノ第三節

命婦ハまゐりくのあかりハと云ふ」大輔ハ命婦ハ継母のもとにハ住着（スミツカ）ぬ之○こくにハくる」命婦ハ末摘の方へたえずくると之○の給ひしもしるく」源のあるてのゐひしめく之○いざよひの月」前節に思ひ合せ○ものゝねごときべき夜にもあらずと之朧夜なれバ之○たゞひとこゑ云ふ」琴を一声所望仕まつれと之○うちとけたるすみか」ハやせき方之命婦が局などにや○うしろめたう

ちゝ（比之命婦の父之）の大輔（たいふ）乃君ハほかにぞすみける。こゝにハ（○末摘の方之）まゝはゝのあたりハすみもつかず。姫君（○末摘之）の御あたりをむつびてこゝにハくるなりけり。のたまひしもしるく。いざよひの月をかしきほどにおはしたり。いと（○命婦詞）かたはらいたき（甚オキノドクナ之）わざかな。ものゝねすむべき夜のさまにも侍らざめるにときこゆれど。なほ（○源詞）あなたに（末摘の方ニ之）わたりて。たゞひとこゑもよほしきこえよ。むなしくてかへらんがねたかる（残念）べきをとのたまへば。うちとけたるすみかにすゑ（源を之）たてまつりて。うしろめたうかたじけなしと思へど。しんでんにまゐれり

とおぼけて」気づかのふ
しく忍多きく○おん
でん」末摘の寝屋へ

小ノ才四節

けとのぬしく」常よりも琴の音はまさりぬ
べき夜のけしきよ僅
されてゐりよ寄り
しとく○かあふ
しきに」かいそぎし
き内裏のまゐの出入
よ隙なくて○きく
ある人こそ」琴をゆ
人は必あらうとく○
あいるう」俗無主意
く○むねつぶる」命婦の
かよ気おもめきく○
なるまぐのりに」源末
摘の琴をゆゆのひて心
よ思ふよ、弾じのふ手

たれぞ。まぎかうしもされぞら。梅のをのしき枝
ふいぐしてものしのふ。一小段の才三節く。源末摘花
よきをりこれと思ひて。命婦詞
らん。と思ひしゐへらほく夜のけをひよきそれを
べてをんあはゐくしきいぐ入よ。えうけしそも
らぬこそくちを。残念けれ。といへば。末摘詞
もしきよ切ふふ人のきくだのりやハとめし
よそるも。あいるういぐゆのそん。とむねつぶる。
末摘琴を
思ひのこのきるらしのふ。をのうゆゆ。なよバ
のりふのきてなるひど。ものくねのらのをぢ

ハふのきとふちけれ
ども侍従の弱をとな
るとく○あれとうり
て」末摘のほ住居の
きゐく、眼目く○いの
よ思ほしのことをに」
どのやうよれをの比
ほふよほんを残しな
ひしとであらんと源
の思ひく○昔物語な
どよ」日注ようつほ
の俊蔭を引ていへど
比ふハたぐらるき物
強とえてあるべし○
やをらひあるよ」俗え
会せのふく、

小ノ才五節

みくるさせならじ」
命婦ハまづ琴一手よ
ておのせやてあまり

とるるもれられぞゆよくくもおぼされぞいとい
◎◎◎◎◎。
うあれとうりてさびしきおよさぞこのりの人
のをを思ふふ　京常陸の宮
れふるめこのうう。ところせくこのづきを急たり
けん。アトモイナク　名残　なくいのよおもほしのことをとるこのら
んこのやうのふよこそく。昔物語よもあをれなるとど
もありけれ。など思ひつぐけく。ものやいひよら
ます。とおぼせどうちつけよやおぼさん。とんを
づのしくて。やをらひあるまふ。一小段の才四節
て。物の音を源よゆ。命婦たぞこのり
のせまらる状なり。命婦　このどあるものよく。
いたうみくるさせならじと思ひられぞくもり

幾手も源よりせまつらじと用ゐたまへる。命婦の源よりやはらうどの云ふ。命婦琴をやめさせまつらんとて、ことざとそのことをいひ又来客の約束ありなどいふ。命婦なるべし。なほ中途半ばよりてやうやうあれば歎息したり。源ようもせばしたりけるかなどまづ今宵のやうをおもしろしと思せる。

一ホノ弟六節

心よくくてと思へど奥ゆかしくくてと思へばいでやいとモウ。命婦いろめたがちよ。侍るめり。まらうどのこんと侍りつる。琴をひびかせまつるもこそ。今いのどのよをこめうし。伊格子さして琴をあまりおそくせざりしかばこのさぞこのへりたれば。なるなる。なほよてもやうやうぬるるなるものゆゑとく。残念なるもあるべし。ねうとのふ。気色をうしとおぼしたり。一小段の弟五節。命婦いきくて源よ耳別させまらじと。と用ゐたのさまあり。源何おもしろくはけぢうきはどのけをひたちきくせさせよとのたまへど。命婦何ところくてと思へばいでやいとうるさのなるあ様よおもひ煩てころぐるげよものしきまふめる様。いろめるきさ源よきこゆるはやと。立ちのはば却て紫じられたまへんと命婦の源よりやはらうる。命婦の源よりやはらうる。げよさもあること。源よ多く人もうちとけてうらふべき人のきはく。きはとそあれ。なほさるべき人のほどどもれば。格子やうのけ。きはほのめのせ。とかうひのふまつ。源又他の方よのけ。きはほのめのせ。とかうひのふまつ。契約束やうらんとうるこのこやあらん。いと志のびてのへりのふ。一小段の弟六節。源琴の音をやめのふうらよ。命婦何源へやんのまめよおのふ。うへのまめよおのふ。琴をまつるもこそ。源琴のこのへりたれば。なるなる。なほよてもやうやうぬるるなるものゆゑとく。なほ思ひのへらるくをりく侍れ。源のやうのはやつれ姿をいとでこのはらんじはらん。帝のときこゆれば。源たちのへりうちとらひて。源何と人のいそんやうよとおぼ。谷人

きこゆるはやと立ちのはば却て紫じられたまへんと命婦の源よりやはらうる。命婦の源よりやはらうる。げよさもあること。源よ多く人もうちとけてうらふべき人のきはく。きはとそあれ。なほさるべき人のほどどもれば。格子やうのけ。きはほのめのせ。とかうひのふまつ。源又他の方よのけ。きはほのめのせ。とかうひのふまつ。契約束やうらんとうるこのこやあらん。いと志のびてのへりのふ。一小段の弟六節。源琴の音をやめのふうらよ。命婦何源へやんのまめよおのふ。うへのまめよおのふ。琴をまつるもこそ。源琴のこのへりたれば。なるなる。なほよてもやうやうぬるるなるものゆゑとく。なほ思ひのへらるくをりく侍れ。源のやうのはやつれ姿をいとでこのはらんじはらん。帝のときこゆれば。源たちのへりうちとらひて。源何と人のいそんやうよとおぼ。谷人

一ホノ弟七節

うへのまめよおのふ。帝はなほあまり実法よあるべしとおもしめしてのることをのうぞんじまるをりく侍きとえ。源人のいそんやうよとおぼ。谷人

云べきやうよいそぐとあ〜きゝ不ハ少〜おしのくしてあれとも○あれをあ〜〜きゝ云」源氏おぼふるひを好色といそぐ命ぬの多指るゞ苦〜きとるらんとも命ぬハきめのとれるれでかくのゝふ、

一ホノ弟八節

ぎんごいの云」遠垣ん、末摘の所をまひの荒たる狀をいふ眼目ん○かくれのう」あげの方よん○こゝろかけたるをきゝめ此男ハ末摘よ心のけしんうと源の見ん○此夕つう〜云」今

なあらハきれそ。きれをあゞ〜きゝふるまひといそぐ。命ぬのたゞ女のみ有〜こらん。とのゝまへバ。あまりいろめ好色〜うとあぼして。源のおぼ〜てゝ。ゝうの孫ふを命ぬんこゝと思ひて。物もいそぐ」きんでんにのゝこゝ。末摘のやゝをもをんよ。人のけをひきゝくやうもやと笑ん〜して。源の出るこゝ。やをゝらあちいぞのふ。一小殿の弟七節ん。大捕命如御れて源をもとゝきをるさまを敘〜したり。きれこのいのたゞ源をこ〜をれのこりたるかゝれのうゝよ立よりのふよ。もとゝうたてる男ありけり。注なんのけたるをきゝめのりけり。とあぼ〜て。このげいよつきてたちこのくれのへだ弟

夕弟ゐも源と共よ内裡より退り出〜を〜〜いづちるらん」弟ゐハよ源のゆのふ何所ぞと〜〜たゞならで」たゞごとまてふあるまゝ〜と弟ゐハよあやし〜みて〜源の後をつけ〜し〜〜〜のりや出るふと」源ゐり出るふ〜〜ちゝまつるり〜り」弟ゐハよ待〜〜ぬきあ〜よ」俗よかぬきあ〜さ〜足ちどいふ〜〜ふとよりて」弟ゐふと源のたゞ〜ぎみのふ不〜よりて〜〜〜ゆ〜ろもよの糸」大内山ハ弟弟をいふ〜いさよひの月

弟ゐるとゝり。此夕つのゝ。ちよりゆろとゝもまま。このでゆひけるを。やゝ源ソヤ大殿まゝもよゝ〜び。二条院よゝもあらで。源と弟ゐとゝ別ゐ弟ゐひけるをいづちるらんとたゞならで。弟ゐも思ふ方あれどゝゆ〜くこのゝあれど。法あとよきてうこのゝひゝり。あやし弟ゐのさまゝ〜きてるよ。かりぎぬをゝのゝないぞ〜ろまて〜きけれど。えゝ源のゝとゝりのゝぬよ。さひぞよかうとこのゝ異方よ源のよ入のひぬまバ。かゐもえぞ思ひゝる袖。末摘の琴ゝぬよきく〜ついて付たてるよ。このゝりや出のふ。とゝ〜ゝまりゝりゝり。天ハ源とゝもえゝ源ハ弟ゐを弟ゐき弟ふで。糸とゝられゝ〜。とぬきあ〜よあゆ

ハ源をきこえん、さハ諸共よ袖つゆハ知ーかのを、源ハ世家よ入りのふことをかくしめへるよと恨むへ○人の思ひよらぬことよと」ありもひよらぬ中ねのまぎれよと源のまくむへ○さしとるのぬの家」上のいさよひの月とあるをうけて源自らを月よせて云へ、さハ月ハ里ことのばおーちるべて照らせば皆人めぢべけれどその人方までを見ゆくハちきめのをとへ○ぜ以ぜんぎりこそ」このやうの内ありきねるべき限り多ちくてハいの

らのきのふよ。ふとよりて。中将詞ふり捨させ給へるつらさよ。内おくをつつふまつりつる。

乃中

めろともよ大うち山いでつれどいるのさみせぬいさよひの月。とうむ。ねこきれど。中将詞

中将詞

ひ天とえのふよ。源そこーをーうなりぬ。源詞人の思ひよらぬことよとよくむく。

源

さしとるのぬのげをばうれどゆく月のいる内のやまぢたたれるこげぬる。中将詞うち志こひありぬ。いのよをさせ給いん。とゆ巨のふまことハこのやうの内ありきまる。ぜ以ぜんぎりこそをるぐ

ぐあらん、絶き限り多ハ
まハ物のそ尾よきこと
も侍らもとえ中将詞
きて限り多よまるべ
ありーをといえ○
おくらせのハでこそ」
ほ供仕るべきを後き
させのハぐあらハ○
このなてーこ」夕白
のことえ源のやうるえ
つけらるくやうるれ
どこのの夕白のことハ中
将ハえ志らぬとえ○
おもきこうよ」重き
功へ源ハよのの夕白
のとの中将よ知られ
ぬをいくくまがくよ
おぼきえ○おのく
志さーむのこるもあ
まえて云」源も中将

志きこともあるべけれ。おくらさせ給いぞこそあら
め。やつれ思ひやつれたるほ志ありきはよ。おるぐーしきことも出き
なん。とおーあへーいさめらえてまつる。源乞うのこと
みつけらるくをねこーとおぼせどこのなぞこ
こそえくづぬ志ぬ代。おもきこうよほこてろのう
ちよおぼーいづ。おのく契れるこるもあまえて
ゆきこるれ給きぐ。ひこう車よのりて月のをお
いいほどよ志こぐくれたる道の程。ふえふきあそ
せて。大殿よおもーぬ』一小段の中八節へ。源再度末摘の方へ思ひ出て。ふと中
将よ逢のこふ状へ。是ことを一小段とへ。ぼふよ月のをそ
き程よ」とえぶ。上の中二節よこの限の絵月夜よ」中三節よ

も外にあまた方あれど、その女の方へあまえて行のみにて、同車して大殿へ帰りのふ也、

二小ノ才一節

開きはじめて」直衣をめし替て源の着るへあふ也○つれなう云々」まちぬ顔して今内裏よりきのへるさま也○こま笛」狛笛也、和名集に篇万古江布除吹處而六孔之笛也とあり○ゆぎさとびちくひけど」中務の矢ゆぎさと弾に琵琶ハ引けど也○此の矢云々」此中務の中務はいのけのふをもて離れて中務ハ源にんをとむる

いさよひの月をかしき程に」。此八節の上にかけてつきてみちのくれのへば」。などいふに照応する文法なり。さそはるれどもおぼせ給はで。見ひていりて人々え見ぬ廊にあるほどめしてきこの人給ふ。つれなういまくるやうまで御笛どもふきさそびておはすれば。おとゞまれのきてまぐし給ひて。こま笛とり出のまへり。いと上手におかさそれれば。いとおもしろうふきのふ。琴めしてうちにも。このあさにんぼうる人々にひかせのふ。中務のきこぎぎとびちくひけど。此の矢こころのけしるをもてそれまで。たゞこのたはさのなるほけしきみなつのしきをばえそむき

とえ○おのづからかくれなくて」源にあそびきしょのあらはれし之○すさまじげに」中務琵琶にかゝくまびしてる○見えて見まらぬ云々」中務かくてハ此段にあるのハ不都合なれど、源を一向に見まらぬ所にあらんハんぼそしとえ、

二小ノ才二節

哀げなりつる」末摘の住居のさま也○あらましごとに」まさにみぬさきより也○見えそめていとこうんぐるしく云々」この心て末摘をみえそめてんに入りならば、世にもて

聞こえぬに。おのづからかくれなくて。大殿なども よろしからず思ぼしなりたれば。物おもはしくはしたなきここちして。すさまじげにてよりふしたり。見えてつえなまらぬ所にいのけたるれならん。おもんぼそくおもひくらぶれたり』二小段の才一節之。大殿にて管絃の遊ひしのふ様之。中務の女房のことを叙せり。○次ハあちハありつる琴の音をおぼし出て。哀げなりつるすまひのさまなども。やうかへてをかしうおもひつゞけ。あらましごとにいとをかしうらうたき人の。さてもしみをとめてんとおらん。おもひそめて。いと心ぐるし

踏みのるほどもなやれまさんと中務のみよ思ふ○ずいさてはをぐしのひてんや」俗マサカニ源のたぐハありきのふずいと中務そこ〜嫉妬くんもとるく思ふ○いづまもく」源つも中務つも○おぼつかるく」志のとも志くん○さやうなるまをまひまをる人」志の迷なる住居をる人いん○ものの思ひたりたるけしき云〜」末の花よつけても、いひのハしてこそんぐせおーをるらるれとん○おもーとて」を多おもくハ。人をもゆてさるとぞのりやさとぞんもさ海あーこのん。をどさへ中務を思ひたり。源のこの夫のあうけきぞみありき孫ふをまさてハをぐしのひてんやとるまねこうあやうけ。源より中務より也そのおちこをるこのをるこよりふこをどやりみふべ〜いづまもく返事云迎び。おぼつかるくんやまーきよ。あまりうこてもあるのれさやうなるをまひをる人ハものの思ひたりたるけしき。をのをるき木並。京の家ぶきよつけてふとりをーなどーてんだせおーをのらるくをりくあら

おもーとて、あまりよ埋きて返すをもせぬやうをるハあーと思ふとん○中務ハまのそ云〜」中務ハまーてんせのゝく、とん、

二小ノ才三節

志ぶぐの返す」源のあ〜へハ末摘のもとよりは返すありつやと中務問のふん○されぞよ云〜」源ん之まてハ中務も文をやりつるよ、と思ひて笑のふん○いさこんとーも云」赤ハ又ん、とも思そぬかよ文をどスもせどとん○人ときーけると」源の河をゆて源へハ返すのゝーををぼんこそ。衣なるべけれおもーとそもいとかうあまりうもれあらんハんづきをくゝろびたり。中務ハまんていられーけり」二小段の才二節之源中務も末摘花を思ひをる如なり。

例のへぐそきこえのふぬんまそ志ぶぐの返すハん孫ふや。んこよ中務思ふをかきやりーこのよこのまめたるこそたーたをくてやこうまーこのとう中務ふれバされバよいひよりよけるをや。微笑とほく思まれていさこんとーもおもくみだるやみるとーもるーといちへすふを。人ときーけるとぬこうもふ。源ハ末摘をん云をふのうーもふをぬこのうなをさけをきを。源をん海志く思ひなりをーのどかうこのゆ中務のいひありき

けてのもとゐなて、さて人まうけけりと聞たく思ふ〇さてうぶほまて」系ハ先ほいひ系のへど中絶てもておのバ、末摘ハ中ねようびきて、さてうぶほまて系をもてゐのとゐ、

二ホノ第四節

「おぼつかなく」思ひより源の命婦ものゐ紀ゐ〇さりとも心ごのきん」源ハ思ひ〜きあたまていひよるまあらねど末ものとげぬやうなるまハなーとゐ〇物のづから思ひあやまち」自然と男の方まて思ひなおら末ぢまどけられぬやうまるらん

けるをとおぼ。源ハ中形ハ中ぬ〜ぢまいひなれたらんこのまぞるびのんう。さてうぶ思ひてもとめ。源のことを紀思ひをまちたらんけーきこそ。うれハーなるべきれ。源ムネンナルとおぼして命ぬをまめやかのまうまらひ給ふ」二小段の第三節ゐ源と中将と末摘のことを物語ーまふ。おぼつかなくまてをるれたるほ末摘の家色まんいとんうき。末ハ源をぬ色のなまいひよると疑ひまるんとゐ紀ぐーきこのまうこのひよせのふまゐあらめ。さりとも心ごのきこてろハえつのをぬ物を。女のこの部てんこーどゐくこゐ人のんれのどやあなることとなこて。思をびよのゐのまるまんおのづから思ひあやまちまなりぬべきん。親兄弟の苦情ものくゐのどのまて。おやいとろれもてあつのひらちむるも

とゐ〇なおあ〜」なるあらくゐ〇らうたあるべきを」カハユラシ。ぐきものをゐ〇いでやゐ」あ源のぬゐるふ風流のゐこの立場ハまるまじ。只物つみーのふのものぬゐまこのまひのふんとゐ〇ものさやどり」僧馬樂ま面やどりこのさやどりやどりてまのらんまでたをを」とあざれどけハ只のりまやどるといふほどのゐこゐ、

二ホノ第五節

「ひらハやゐゐ」瘧病ゐ、若紫の巻ま物語ほる女法ゐ〇おのきぬた

なるう。ハやをおらん人をなおーるんらうたあるべきをとのへバ。命ぬ河いでやさやうまをーきこのほあさやどりまハえーもやとつきなげまこそゐ定位ほどゐとのをゐ。ひとゐまを物づくみーひきいりたるあさハーもかりおるもうものーのふ人まなんとゐるありまあるうきこゆらうらうーくさえをどるきゐんと性質ーのゐ。源ゐ末摘ハ中者らーくさえをどるきゐんるんハなきるあり」いとこめのーうおほどのるらんこそ。らうたくハあるべけれ。コドモラシク オホヤウ カハユラシク

とおぼーしたをれぞのふ」二小段の第四節ゐ源いるく。末摘をゐぞやとゐ思ひのふ状ゐらいいやゐとゐいらひあまひ。人ゐれぬもの思ひのまぎれも。源のいとゐなきやうまて。まこゐ思ぎぬ。

の事も」是ハ上の冒頭の文脈を受て夕鳥の巻ニ思ひ出せるこゝ○「ゑ
ちのきみ」末摘ハ先陸奥の郡名なれどい
ふこゝや、或ハきみハこゝやの誤れ○よづるゑんやまし〳〵」男女の情合
を末摘ハ未だ知ぬよやとこゝ○いうるやうぞ」かやうに末摘のつれ
なきハ何れぞとこゝ○いとほし」俗キノドク
こゝ○めでたなれて云」
云ふつきなきことゝ思ふやうを作らみど、
あまりに物づゝみ
のゆゑぞとこゝ、末摘
の体を命婦の家にて
いふこゝ○それこゝハ

秋の比思ひ出づ（ほうこう）のよおぼし〳〵つゞけて。おのきぬ〻おい
もみいいよつきて。（夕鳥のもとよりかりのこゝろをうけ）ゆよくこのり〳〵きえ。こひ出うおぼし
出らるゝに。えゝ（末摘のこゝ）ちのきみのはたゝ〳〵ゆ正のゝ〻ど。
なほおぼつかなうこゝろ乃こあれぞよづこのぞんやまし
（ヤッパリ　ヤッパリ　ヤッパリ）
う。まけてハやすぐ（ほハまけじ　ほうこう）れぬさへそひて。命婦をせめ給ふ。
いかなるやうぞ。いとかくるとこそすぐ（ほ有）ぬ。いとあ
しと思ひてのゝ〻ばいとほし。（命婦ハ）もてなれ
てなげなきほどゝ〻もおもむけ（オモフヤウス）給らゞ。たゞ大かた
のほものつゝみ（ハリニ）ぬ。とゆゆれバそれこそよづこのぬ

（命婦ハ）

十七号八

ことなれ。ものの思ひしるまゝすぐきほど。えゝとり身をえん（エウ）
ゝまのせぬ程こそさやうにかゝやこゝ（ハヅカシキ）きもとゝり
なれ。なほどゝも思ひ出づるまゝのゝ〻らんと思ふにこそ
そこいのとなくつゞまんばそうのこゝ思ばゆるを。
（末摘も源と同ハ人）おもゝ〻ふいらゝ孫いんハ（源の祖父）ねゝのひこのるうんちなんを
きこなるやうのやとよづけるこゝちらでそのあれた
（簀子）
るこゝのこゝよたゝ〻ぎまゝ〻ほゝきるりいとおぼつあ
ふちんよおぼこゝ（末摘の承諾）
ゝるうこゝ孫えぬんちこゝる孫。このこゝゆゝ〻なくと
（命婦ゆゝたゝぐうれとこゝ）
もたゝぐこのれゝ。ゝいられ〻ゝこゝあるゝてゝ
（キノセキコンダ　アシキ）
ゝよもあゝゝゞ。ゝるどこゝゝこひ孫ゝ

源氏物語講義　末摘花　十三

云ゝ」夫ハ男女の情合を知らぬなれとこゝ○
ものの思ひしるまゝすぐきほど」俗オボコなる
ハこゝ○ゝるよこゝも思
ひ出づるまゝのゝ〻らん」
末摘もつゞまゝ思ひ
出づこゝておもゝまんと
思ゝバこゝかくゝゝせ
とこゝ○そこいのとこ
なくつゞまゝ思ひ源
もゝるこゝとなくつれく
ゝこゝ○なゝるゝやこゝのやこと
よゝばこゝく思ゝくゝ
ゝこゝ○なゝるゝやこゝのやこと
よゝばけゝ」世の好色の
人の女をやり中立
をたのゝこゝて思ひよる
ゝるどやこゝのこゝとゝるこゝで
いひよりたきこゝ○
ゝこゝらひゝゝ」源の命

（二小段の第五節ゝ。源秋）

ぬよ謂ぞらのふゑ之、
二小ノ第六節
大なるゝるあり」源ハ人ゝの上を大概のやうよゆあつめの丶と、一ゐゆめへるゝとを忘れのゝぬ癖のおもほえ之○もゝのるきつゞで」チヨツトシタ序之○よ川おえしくよしめき」源よハ似合しく仁体らしくもあらぬを之○なおくなるみちびき」半分ハ思ひしあらぬ手引ように○いとほしき」きのどくのこと之○ゆいれざらん也」命婦承知せぬもの之○ひがくし」頑固らしき之○ふかまへる」眼目之、肖肘

の源のなかとられバいよいく命婦を責めのまふ状なり。

彩よよある人のありさまを。大かたなるやうまて。ゆあつめ。みゝとゞめ給ふくせのつき給へるを。さうぐしきよひゐなどよなりのるきついでよ。さる人こそとおりゆえいでゝるしよかくつきとお満しうのほひられバ。なまかづらしく。姫君の様ありさ満もよ川おえしくよしめきなどもあらぬを。なおあるかなるみちびきよ。いとほしきことや。と連なんとおもひけれど。きみのかくすゝめやうよのまふよゆいれざらんもひがくしかるべし。ちゝみこのおえしけるをりまだよふるよゝるあたりとそおとなふひゆゆ

よむかぬをいふ之○おく世よめづらしきゆけきひめ」源のめづらしくいひよりのまふを之○なま法女ばうなども」なま判くの女房等ど源のいひよりのまふをよろこぶ之○あさましう物つみアキレルホド物エンリヨスルと之下の三小段第二節及第五節よ照覧○憐んよつみぱ」末摘の憐んよ源おかなひぱらん○あざめきたるそやりん」深き思ひなるまきん之○父ぎみよもあらん」父の兵部の大輔よいひあふせ給ふこと、

るへもなかりけるをませて。今ハあさちふかくる人も絶えぬるよ。おく世よめづらしきゆけなるひのよりて白ひくるをバ。なま法女ばうなどもゑみまけて。なまほゆえふかへとそゝのかしきれど。あさましう物つゝみしのまふんまて。ひさゝふるまよえもいれのまぬなりけり。命婦ハさらバさりぬべからんをりよ物ごしよきこえ給ひんほど。ゆんよつあひハさてもやみね。まさるべきまてありとも。おえしおもんをとゞめのまふべき人もなし。などあざめきたるハやりんなうち思ひてちゝぎみよもかゝることなどもいひきゝけり」

三小段第一節

まくらの月旧注よ引あれどそれも及ばぬ也下の月やうく出て」とある首尾え○源氏の光がのりさやけく」秋の夜のけしきえ○こゝろぼそくて」上の一小段の第二節よくてのこりゐ残たるを」とあり下の第二節よこのぞのりんほぞきほゐ根よ」とあるよ照君也○内せうそこやゆ巫つらん」命婦より源の方へ密内やちけんとえ○きんそくのあされて」末摘命婦よ侵されて琴をた

二小段の第六節え。命婦いまいいるみぐさくて。末摘をたばうらんと思ふ物なり。兄まぐさを二小段とし。此段第二節に。源中将も末摘を無恋なる状をかきて。さて源も此の後ハ末摘をさまでハ思ひのふよど。中将の無恋なるさまをえぬひて。すけどんよりくいひよりのふを。命婦ハあハやきくうけひのぞして。さて源の心をひきえてはよたぞこの状なるハ。是文法きろきのろろあり。八月廿余日よひるまで。まくらの月のの抑なり。

んもとなきよ。ほしの光だのりさやけく。松の末ぞ忘ふく風のあとこゝろぼそくていまくのことかうりでうちなきなどこのよいとよきをうのれと思ひて。源せうそこやきこゑつらん。例のいと思ひておもてしたり。月やうく出て。あれくるまおきの月どうとまくうちなぐめのふよきんそくのきれて。

きのふえ○まくこいまめきたるけを當世の風よるしたてまつりたきとえ○人めしなきふるれびとのむる人目もなきふとえ○ハ助字え○いまいしもおとろきぞ風よ命婦今夜寝きき顔よ末摘よもえ○まくぐこゑ」源のおハしもおもと命婦ぞ末摘よいふえ○人よこのまくぬよくしをえく」末摘の風ふなきハ命婦ぞんよもあるひぐさきと源へまくるとえ○まくのたくやまきえく」よのつひのあやきき人なくまくらぬ源な

ほのうよかきまくこのふほど。けしうハナシトん。あらび。命婦こゝいまめきたるけをつけぞやとぞこぐれたるんまえこゝろもとまくおひまくる人めしまきふなれど。んや源きくいりのひ。命婦をよぞせのふいはし。源もおどろきぞ風よ。命婦ハオキノドクナルとこのこゝらいくきこゝろざのれ。まくぐこゝおハしたくれつねよかう恨ゆえ。命婦の中将のとぐうぬを源のまくのふをんよあるまくぬくしをのくきこゝ辞退をまひ侍根えまバ。源の主よりのんとえこのくこゝろりもゆ巫ふらせんとれのひまくるなり。いのぐゆ巫うへさむ。なくくのたナントヤ上テ巫サントんまくやまきはふるまひまくらぬぞんぐくしき紙。キノドクナルしき紙。

まうぶん○めのごーよて」物ごーこそほよ男面あれとそ○いとうひ〳〵しげ」甚ほあらあしげとそ、

三小ノ才二節

のぎうちなきく」うえなきくとうとそ貴人のとそ○物やのあつのひうーろこそ〳〵」あやの世話よなるあひだそそ○のぎありんぼそき」盤ゐべきくまふあひ別のふこそよあるべけれとヤシきらそゐそ一小の才二節、三小の才一節よふぼそきとある巡ゐそ○さきのよ人のいふとはゐ〳〵」サウハイフモノ

ものごーこそ。ゆ巨のふんときこーめせ。といく。いとたづこーとと思ひて。人よものゆ巨んやうゐきらぬを。とそおく方ざそまくゐざりいりのふきよい。とうひ〳〵きげなり」三小段の才一節之。命婦末摘をいろ〳〵よたぞこるさはそ。

命婦うちほらひて。いとときあ〳〵しうおふーまきこそんぐるーけれ。おぎのぎりなきくふ。おやのあ川あひうきろみゆ巨のふ祖こそこのびのふもとと。りなれ。おぞあり（カホドニ）んぼそきばいあ稜よ。なほよを（ヤハリ）つきせびおぼーきぐかるハきなうこそとを（こ）くゆ。（末摘の姉之）およ人のいふとはつようもいるびぬ

ノヤハリ人の云ことを強て辞退せぬけんとそ○いらくハゆ巨で」返ゐるどせぞ、たぐゆ」とるちものこーよゆあんとそ○ものこーるどハゐろ」源を寶子なるどよ置くくゐ都合なるちんとそ○ほきとぬゐ」褥を敷て源の座産を設くくそ○いとつまーげよ」上の一小段才一節、二小段才六節、及び下の才五節ゐ巡ゐそ○あやうこそ」やうもめるとるちんとゐそ、

三小ノ才三節

ざーこーは」曹司人局のとそ○夕まどひ」夕ほんゐて。いらくゆ巨で。（末摘河）たぐきけとあらば。かうーーなどさーてをありなんとのゐふきのこるどハびん（格子）（命婦河）なう佐りちん。おーーたちてあるくきほふるまひふ（強てそ）（アイソモナキ源の）どふよもなどいとよくいひるーてふこまのきハなる隙（命婦のそ）（アラシ）るまづのらいとつよくさーてほきとゆうちおきそもきつくろふいとつ。いいまーげよおぼーーいいいいたれどかうやう（末摘之）の人よものいちんんぐくなども。巻ゐもきり孫ハざりけれど。命婦のゆいをみるやうこそとおゆひて物ーのよ」三小段の才二節之。命婦源の座産を設けく。物越よ逢せまつらんとそゐ状之。めのとぐりおん（ラシキ）（老）人などハざうーーよいりふーて。

圓居ゑ、夕ぎりの頃女房の素りて物語りをするをいふゑ○おいろげさうゑ」女房だちゑ源を無礼をするゑ下よ悪房を○さうどうゑ」正身ゑ本人といふゑ、末摘をいふ○ゆげさうゆるくて」上よ悪房に○いとつきせぬを」源装束るど用意して来りのようさまゑ○みーらん人は源の内姿を物をゑ知るる人よゑせたきとゑ○おなのたゑあるゆすぎきとりを」末摘をおもひくくに命婦あるゑ、たゑハ光栄ゑ○さーをぎたるこはゑ」出過

夕まどひーたる祇なり。女房ゑ召きゑ二三人あるは。源のゆをゆふゑよよめでられゆ門ゆ稜を。ゆのーれものよ思ひ内をて。おいろげさうーいいーあくりよ。末摘ゑ召きゆぞ。なりのゑうくろひゆゆれだ。さうどうゑゑるゆのゆげさういいいゆるくておゑゑ。源ゑをゑことはいとつきをぬ。をうちゆびようういーたゆくるゆけをひ。いうどうなミナ。ヤカニテゑまめきて。こーらん人よこそゑせめ。なゆのゑゑある海どきゆうちをゆ。あないとほーと命婦をおりゑど。たぐおほどのよりものーうゆふをぞうーろやをうさし。オホヤウニ末摘のゑ。末摘のゑをゑをぎたるこはゑ迎をゆと源をどゆ。命婦がゆ思ひけるゆ。

ぎゑるとふ、源よゑられをるこゆもあらーと命婦がゆよ思ふゑ○せめられをるつみゑ」命婦ハ末摘の中ゑのゆよ付て源よ責られをるゑ罪を去らんとてせーをゆ、源の末をゆとげめハぎふ、ふぐうーき末摘のゆ物思ひやゆこんと業ど居るゑ、

三ホノオ四節

えびのゑ」裏衣香ゑ香の名ゑ○ゆうるのゑぎや」をきけるきうぎよと源紛きゆゑ○いくをたびの衣」いくをたびハ衣ゑゑ、をゆまハ毒言ゑ、ゆのをハ

罪去事

つぬよ源よせめられをるつみさりどゑ。んぐるーき人の内物思ひやいでこん。るどやをゆらびおもひ命婦ゆよ末摘の物ごゑ。

三小段の第三節ゑ。命婦の中立よりて。源ゑ。

ゑ。ハ人の内思ひどをおぼせばざれくりぎゑる人やゆ。末摘ハ者の内ゆるゆ逢ひゆるゑんとをゆる。さゆゑ。

仁所ラシキ

うれよーぞみよりいこよるうおくゆーうおぼし。末摘の仲ゑ

ゆるゆよとゆうそ、ゆをれて。みぎりより孤ゑる

けをひ。思びやゆえびのゆいとをつーうゆをり出ゆ。おほどのゆるをされ。源ゑよとおぼさる。年代

思ひゆるさゆるど。いとよくのゆひつぐくれど。末摘ゑ

ゆーてちのきゆいらゑをゑえてなーゆりゆ

のうざや。とうちなげきのふ。

（注）いくそこびきこぶきこぶきまきけぬらん」あの方いひそといそぬるあこよ。ちさまひもきくこよろあ

（末摘）たまこきくこーとのふ。女房のはめのとご。（乳母の子）

待徒。おこうとそいとやつとあなるこの人へいとんもと（気バヤナル）（モド）

なうかこらいこーと思ひてさーようてゆゆ。（カシク オキノドクニ）（末摘のそばへよりて）

（侍従）ゆぬつきそとぢめんとはさきそおそこうへ

むすうきこぞこの川はあやなきと。とこのびたるこの。（ム）

こよおりあるらぬを人ばそまいあらぬやうに（重々しうあらぬ）（末摘のうつぶらいふやうに）

ゆゆをるせど。思どまりはあまえて。とゆ孫へど。（注）思ひ一福よりハソバエテ

かはこけもなく恥ずしきなぞとこ。いそぬをもものあ」をハものいそぬを、却ていふまさるとこともあれど、あまりまおーこあていそぬいくるーきとぞこと。なうやうやう（注）

（注）ほいとめづらーーと思ひて。まるいふぎこぞんなく思ひ人さまこ

めづらーきまま。ぬ。くちふこぎるこざこのれ。

（注）いそぬをもいふまさこと。ありるおーと

めたるはくるーーありるこ。なるやこのやとたるあるき

ここなれど。をうーきさ海もまめやあるものあへど何

ものーのふ人よやとねこくてやをちおーあけ（ザンネン）（ソロく障子をあけて）

て。入こあひまたり」三小段の半四節人侍従末摘よ代（注の入こ）

命ぬあるうこて。たのめのへるといとほーけ乳ぶ。志（油断させたると）（末摘のためキノドクこと）（侍従へ）

らぢこの思よて。このかこへいまたりこのこのへども（冷泉の局こ）（侍従へ）

（モマタ）こ世よあぐひなきはあ板のおとぎこにつこ（注）聞

かはこけもなく恥ずしきなぞとこ。いそぬをもものあ」をハものいそぬを、却ていふまさるとこともあれど、あまりまおーこあていそぬいくるーきとぞこと。なうやうやう

（注）ほいとめづらーーと思ひて。まるいふぎこぞんなく思ひ人さまこ

めづらーきまま。ぬ。くちふこぎるこざこのれ。

（注）いそぬをもいふまさこと。ありるおーと

めたるはくるーーありるこ。なるやこのやとたるあるき

ここなれど。をうーきさ海もまめやあるものあへど何

ものーのふ人よやとねこくてやをちおーあけ（ザンネン）（ソロく障子をあけて）

て。入こあひまたり」三小段の半四節人侍従末摘よ代（注の入こ）

命ぬあるうこて。たのめのへるといとほーけ乳ぶ。志（油断させたると）（末摘のためキノドクこと）（侍従へ）

らぢこの思よて。このかこへいまたりこのこのへども（冷泉の局こ）（侍従へ）

（モマタ）こ世よあぐひなきはあ板のおとぎこにつこ（注）聞

おとぎくよつゝゆる
しゐゝ」源のようたぐ
ひちきにありさるまを、
内ゝ者よゆゑ至しのぶ、
源の入のふをなげあ
しゝも思そぬとゝ○
たぐられるもあらば
ゝ」源のやうでもな
くえづすきとゝ○
すぐよるれぬ人の」末
摘ハ大切よのゝ者な
ハれて、いまゞ男女の
情をもゝぬよと源ハ
思ふゝ○ハるばるなま
いとなり」くらけれバ
よくハ見ゑもど、末摘
のかゝちあしげるれ
バきのどくと源の思
ひのふ拙ゝ○るもど
よつけてゐゝ」末摘ハ

ゆゝしゆゑ至ゝ。おどろ〳〵しゝもなげるれぜ。たぐ
思ひもよらぬふあ
おもおけるさう。末摘ハ
くつすきより
るぞ表なるよ。まぐよるれぬ人のうちのしづか
れゝるとゝゆゝしのふものうゝんゆびなまい
とゝ思しおぼゆるにさ海なりなるどよつけて
あそにこゝろのとゝ海らん。源歎息をしてゝ
う出めひぬ三小段の才五節ゝ。源おゝ あけて入
りるゝど。ゝんとそらぶして。うちうめ
きゝ夜深く出めふ拙ゝけふよつすきより御の上
とあるふよの一小段の才一節。二小段の才六節。及び段ゝ才

容貌もよろしゝ又打
解て源よる引のかとを
もなければどうして
ゝ今ゝとなるべきとゝ、

三小ノ才六節

閑おくりよとも。命婦
源を西送りよとも
そで空寝しるゝ○
あるゝのゝるゝぬ人のゝ
ゝ末摘ハ宮の中女な
れバ、平人のあらひ
よハなりのゝるゝしと
んぐゝしく思ひゝ○
ゝるゝきゝゝ無比上
中朝寝ギヤナア是よ
ハとけあらんとゝ○
ゆゝびよりう」気お
ゆるみてねもぐゝ
たりとゝ。①おるまの
でもゝるまくゝり」さ

二節ゝ照応
なる文法ゝ。命婦ハいのるらん。目覚 源のゆりのふを
けれど。おりぬ思ふらゝどゝ。ゝ源ゝ
づくらぶ。源 ゝ
院よおゝてゝうち
ひぐゝきせよゝそ。とおぼしつづけて。のるゝのるらぬ
人のゝ思どを。んぐゝしとぞおぼしける。思ひ乱き
ておゝるゝよ。限中将おゝて。中将ゝ
いのな。ゆゑあらん。サとゝそ思ひのゝらるれ。と
いゝゝぞ。源おきあぐりのひて。源ゝやまきひとりねの
床よゝゆびよりう。内裡より退出しのふとゝ。うちよりのとのゝのゝぶ。中将ゝ

やうに退出するつゐでなりとて○朱雀院の行幸の巻七小段の第一節より、朱雀院の行幸をみるべしとあるを照合して再びいふて○やがてのぼり給りぬべし」父より侍て手紙を内裏へ奉り給ふなりと伝る○まらうとのもてなすあるひのもてなし○特いとねんごろなり」車中にて中納言ゆふげ、ヤハリ源の内裏へ奉るゆふげ、独寝の朝なれあるまじ、何ども多く隠しのふいうちめしとなり、

まるでたべるまくなり。朱雀院の行幸。ふるまい

がくにん。舞。まひにん。さざめらるべきよ。うけのふりを。父の左大臣殿

やがてまいりたまへ。ソノマヽ。まいりぬべし侍る。といそのしげなれ

ば。源氏。さらばもろともに。糸内せんとそ。粥強飯。ことはいひめして。

まらうとのもてなすあるひ。中将もまあれど。ひきつゞけたれど。源と内

川よりて。特いとねんごろなり。とてゆふ

いでくがくいのふとおぼえりとぞうらみゆ

るふ。三小段の第六節へ源二条院へ帰りのふ状へ。

舞楽のとき笛らるゝ。内裏より源へ

ひくらし孫ひつ。のことはぬをあるよといとこ

くおぼし出て。ゆふつかたぞありける。内裏より源へ。不

せくもあるよ。末摘の方よ。このさやどりせん。とてこゝ。モマタ。おぼされぬ

ありけん。ことはまゐりはどるて。命ぬもいと。甚オキ

ほ。きはさ。海のそ。といふく思ひ。末摘へ。ノドクノ

そ。ほんのうちよそ。思ひつゞけのひてけさ

の。ふこのくれぬるも。とうく行とも思ひのこはぬとそ。おもひつきさ

のふざりけり。

夕ぎりれそ。源

そふるよひの面のれ。やさま待こん。ほどいとよん

すこしこゝ。末摘の方

よて。源よりの後の

の。ほ文あるを待ふ

とこゝろんと源の思ふ

召して。夕方よりて

ほ文をつのえしるこ

るなり○けさの。ほ

ぬ。このくれぬる。後

の。文。朝ものあるを。

なるゞ日多てきた

る。○夕ぎりの。

夕霧の。ふこ。けし

きは女。文。よたとふ

る。文。は夕ぎりの

ふこくめく。女。文。れ

れ。れたつそまゞ

又。さるよ。ウルサ、を

源ふる。よのまれ面ヂ

ヤナアとこ○きま

待らんほど」面をれ
なばかるらんとてな
れまをまつあひだと
へ○むもつぶれて」キ
ガモメテへ○いとど
思ひこぶれ」末摘よ
べのをづうしさよ
思ひ乱るゝへ○例のを
し」前まも侍従末摘
よ代りたれば例のと
云へ○それぬよの命
月まつとハ源を待へ、
きハに出るきをまち
とゝる時身を思ひや
りのへ世方まとゝも
ほどよ方まハおも
ひのハざるべけれど
とへ○かゞつゝ」筆
力の強きへ女まハ似
合しゝらぬへ○中さ

もとなうとあり。おい（今夜源のゝ）ますますきけ（ミ）しきを。
人ぐむ（末摘の女房へ）もつぶれてあ（ヤハリ侍従すを志のへとゝ）もへどるほゆ（匹）させのゝへ。
とそゝのゝ あゝれどいとゞ思ひこぶれのゝる
ほどまて。えう（エウ）あるべきしきノヤウニモ）のやうるもつゞけのゝ（アルベキシキノヤウニモ）ふるもバ。夜ふけ
ぬとてゝ侍従ぞ俗のをゝへきこゆる。
末摘
それぬよの月まつ里を思ひやれおもるゞんよ
なゞめせびとゝも。（人ぐ侍従すうきのへと志摘よゝ）くちぐよせめられて。むらさ紀
紙
のゝゝれとゝへよけれど。はひおくれふるめ
◎◎◎◎はさをゞよりゞつゝゆさ
ゝるよ侍てゝ
ゞのをぢまて。おゝゝるひとゝくこいのへり。

十八号一

ゞのをぢ」中央へ、中（なか）
等れをあとへ○おみ
しもひとゝくこゝ」ち
らゝまるもせで上下
斉くかきたるへ女よ
ハ似合ゝうらぬへ○
かゝることをゝ」源ハ
まゞかやうのくや
志ゞ思ひのふほど
のとよ別れのふぬか
よかくのゝふへ、

三小ノ段八節

ひのれまりて」源左大
臣と同乗まへ○お
のくまひどもゝ
ひ」公達名残惜の別れ
舞楽の稽古ゝのふへ
○のゝゞいどみつ」
挑へ名残おとゝゞと
爭ひて稽古ゝのふへ

源（源へ）みるうひなうちおきのふいのよ思ふらんと。（源へよ末摘ハ）思
ひやるもやをのらびかくるとをくやゝなどハ
いふやあらんさをとていのぐハせん。（源へ）系さうとも
（源ハんこのハらゞとへ）んをおうゝてくむとおぼゝるゝ（源のんをへ）陽を考ぬ
だ。（末摘の方へ）このこよハいゝゞうぞなげいのひける。（三小段の第七
節へ。源より此後翁の侍女逝くまゝれり。末摘よりの
侍ぞのへゝハ。例の侍従ぞをゝへまつるさまを叙せり。
（尤大臣へ）おしてゞ殿よいりてまゝでのふよひのれまりて大
殿よおらゝ源ゝぬ。行幸（ぎうがう）のとゝ代けう（奥）ありとおも
ほして。公達（きんだち）あつまりてのゝひ。おのくまひどもなゝひ
のふをゝそ代のとゝそ。ものゝ者をつねよりもみゝあ（耳ヤ）

○例のあそびをしつ。例のあそびをら
つゝの拍子をうちとる。○大ひちりき。
大篳篥。○さゝらゝ。尺八の笛。古へ樂器
に用ゐる。○あんこ。大鼓。まで。高
欄のもとに置ておく
ふえ。○あそびおいさうを。遊びおいさうとい
ふ。四段。○ぬきまはせられてのちひめふ
とゝ。○ちぶく。試樂。
樂のるらしゝ。○いまゝ
ぞ。末摘のことを云
のふえ。○いとほしとい
ふ。○原末摘のことを気
のどくまゝ思ひ扱
○扱きこえて。命婦

カマシク

ぶ。のぶ。いどゝつ。例のあそびをら
ぶ。大ひちりき。さゝらの笛などのおほごゑを
吹あげつ。あんこをさへ。うらんの許よまろび
よせて。まづうちうちをし。あそびおいさうを。
ぢいとまなきやうにて。ぜちよおぼをふだうり
こそぬきまはれ。彼末摘の方へいとおぼつゝ
るくて。秋くれぬ。末摘のうるさうこゝろ
ゆく。行幸ちのくなりて。ぢく。などの〳〵ちる
ころぞ。命婦の内へ来る。命婦ぬい来れる。いのよぞるどとひのひ
ていとほしおぼしたり。扱きこえて。いと

原ゝ

十八号二

末摘のさまを添へ
よとゝ。○このゆるゝ人さ
へ。云。とてきこゆらみる
命婦らまでふん苦
と泣くぶのりよゝ。○
引ろくくもてる
て。命婦ハ末摘のことを
ふまくきさまよいひ
るしておのんとゝ思へ
りしことを。○くさ
いてけるゝもなく。命
婦ゝをさゝくくゝ搔き
て胃をりしこのひゝなる
くゝらんをとゝ。○い
とまなきほどぞや。
ゆ幸の近よりいそ
ぐきを命婦よのゝ
ふえ。○引りるの人
に。命婦ゝぶゝらをと
りるの人といふ恨む

末摘の方へハもてなされたる原ゝふゝ

うゝめてなされたるほんぞへいこのゝふる人さへふく
るゝくるど。なきぬをこのゝよ思へりこゝろよくくも
てるゝてやこゝるゝと思へりゝをくこいてけるん
ゝなくこの人ゝ思ふらんをさへおぼをさうゝじこと
ものゝいそぞ。おぼうづゝれゝふらんさゝ思ひやり
ふゝいとほしけれいとまなきほどぞやゝ。ムリ
命婦の恨ゝ涙ゝをもりと歌きゝ
ゝとうちなぐげゝのひて。ものゝ思ひちらぬやうなる
ゝさゝ紙。こらさんと思ふぞうゝ。とほゝ思ふ。笑
る。このゝうゝつくゝげられぞ。ゝれゝもうちゝまゝく
ゝちゝて。命婦ゝ

キノドクナ

懲

原ゝ

末摘の方へハ原ゝふゝ

命婦ゝ

原ゝ

べき命のあるまじき人よとおもふ。○思ひやりもなくあうぎを末摘のつらくやおもらん、といふ思ひやりもなく、あまりのたゞ人、源の年齢きなるれば世むと命ぬる思ふ。

四ノ才一節

おのむしさきのゆのり。紫上を二条院より迎取のふとゝ、若紫の巻る無名人。○おせきものたぎをゝ。末摘の物恥して、すぼるも笑面なきをおもひてみあらふさんとの源のほゆ。ゆもなくて月日をふる。○うちうへ。物のようのうぬも、おゝ返し

年齢ヨ

そひや。思ひやりもなくなう。ほんのまくるらんも

モットモ

ことつりとおもふ。これほいそぎの祖をぐしてぞ

源末摘のこゝろ

時〳〵おもんしける。三小段の第八節。源氏左大臣と共に大殿へ渡りめふ。朱雀院の行幸近く有て試楽などある拙。是を三小段とす。此段い。

源のおもふことを叙しぎ大殿のことをも叙せり。

はの疑愛

くしゝまんいりのひて。六條息所。うれまさりのふめれば。末摘の方へ。てあれるやどいあをれよおぼしおこらびなどぐ。源のゝ物うきぞつりるのりける。おせきものをぎを。あらふさんのほゆもとよなくてきぎゆくを。源ゝうちうへ。しきまさりをるやうもありの。

ナサケナカリ

十八号三

て紙くゝれば。ふきさりもをることもありとゝ。○ふさぐりのこゝ。ふさぐりまてよくはゝ。ゝど、不審のおもやうもりとゝ。是はのほのこの伏案ゝ。○きゝ丁なるどこゝ。凡帳なるど損ひたるゝ。○とゝ〳〵けるこちど。凡帳のたてくあるおもむのこの立ふをうへぞ、おーやりてみぶちこもせびとゝ。○刻こゝ。ほ基ゝ。ほ膳ゝひそく。秘色ゝ今の茶碗ゝ。○人ゝろきは。ふるひたる撥ゝ。○なよのくさゝひもるく。種子ゝ。宴料理もる

紙くゝ

ふさぐりのたどくしきに。あやもうゝえぬとも。あるまや。ゝてこのるとおぼせど。けぎやこのようとりなさんもまばゆ。うちとけたるひゐのほど。源末摘の方へやをらいりのひてこうしのそぎはよりこまひりされどこうづのらはゝをのふぐくもあらびきて。などいくそこたをれこるものみちとこへけるこちどこうえらびおーやりなどこぶれもぞ。なくてごだちはあうりはぶんひそくやうのもろこしものふれど。人ろきよなのくさゝひもるくなをれげるまこのでくひとぐくふをゝ。まぶこのりまぞ。

ハツキリト

宵居

ハシノカタ

タシカナラネド

唐物ゝ

末摘の前を退て膳ゝ

角ノ間ゝ

きゝ○きゝとるげる
ちびら」汚たる褶を、
褶ハ覆袴之衣也○
さもごのよゝ云〻」サウハ
云モノ、礼をやりて
梯をさゝたる額付と
を、陪膳ノ候そる人の
梯をさゝもハ不義ゝ式
不ハ常陸ゆの人〻
古風をやるさまを
いゝゝ○ないやうぞ
う」云〻」内裡の内教
坊内侍不ゆかやうの
さまハあるとゝのふ
ゝ○命なるおけれバ云
〻」あまり世ゆるのら
へて卻てつゝきとゝ
○卻ゆるおハゝまもく
世を云〻」為陸ゆの内
存生の世を暮ふ狀を

いとさもげする女房。ちろき衣のいひ（イフベクモナク）ちらぶ。◎◎
けゝるゝよ。きゝとるげちなるちびら。えきゆひつけたる
こゝつきかゝる（頑固）ゝゝげるり。さもぞよくゝ（掛）おゝた
れてゝさゝたるひたひつき。（内教坊）（内侍）るいやうだうるいゝぶの
祓よかゝるものどもれあるいやとをこゝ。このけても（トテモ）
ひとのあゝこりよ。ちのうふるまふものとも（近く仕る女房のさまとも）ちり孫を（当世の人）
ざりけり。あそれ（女房詞）いゝ、ゝもさもむきとゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ。あれ。命（いのち）なぞ
けれバかゝる世ゝもあふものなりけりとそうちるく
もあり。ゆゆおゝゝゝ海ちく世をなどてのらゝと
思ひりん。（その彩くちるきを絞くさまゝ）のくゝあのゝゝなくてもそぐる物なりけり。

○とびたちぬべく」飛
立て何所へのけきた
しとうきとのあまり
ゝ思ふ狀ゝ方ふの貧
窮問答の歌ゝ飛立の
ぬつるゝ〻あらぬ」
とあるゝゝおれど○そ
ぞや」驚くさゝゝハヤソ
ヤゝそゝ保の内出ぞと
いひてゝ○火とりるほ
し」燈火とりてゝ、

四小ノ才二節

侍従」上ゝ時ぬゝの
を教へ〻女房るゝべ
し○無記」注ともな
き○ひるび」ゆるの
びたるゝ下の才四節
ゝ照ゝ○いとぐう
れふるとつる」上ゝあ
れさもさきとゝ

とそとびたちぬべく（身震ヘ）ふるふもあり。さ海ぐゝよ人と
ろき事どもをゝうれへあくるをきく孫ふもの（キノド）ら
いとけれバ。（保立退てゝ）ゆちのきて。たゞ人（はゝ）おゝるやうして。
（格子をゝ）
打ゝきのふ。そぐやなどいひて。火とりるほし。
（格子ヲアケテ）（保を）
ゝうゝしるるちていれ（保を）る」四小段の才一節ゝ保一段
末橋を訪ひのふ（うと）さまゝ。
侍従を。無記ゝ。
（不在ゝ）
ハなるゝとりゝ。いゝゝ
ぎりゝてゝるゝをぬんちぞるゝ。ぐうれふな
いゝゝ。（保のゝ）
つる。ゆゆいゝたれいゝゝぐうゝふりけりゝの（け）
ゝ。ゆゆいゝゝゝゝゝゝゝ。
色をげ志う風ふきあれて。おほとるぶら（きえ）消ゝける（燈火ゝ）

あれ」とあるをうけて、愁ひ思へるさま雪のふかきしと之、下に照応し○ほどのせばう」かの院よりハ家の狭き之○人げのすこしある云々」かの院まてハ人少なかりしをいふよりすこし人もあればあんと之○いさとき」ねられぬをいふ目のさめやすきこと之○いとうもれすくよかにて何のはえなき云」末摘ハ志づみたる素直の心にて何の上手もなければ残念におぼすと之○かうし手づから」上よかうしのそざま」とあるを尾之○

をともしつくる人もなし。かのものにおそはれし（河原院にて夕顔の事をいふ）をり思し出られてあれたるさまハおとら（劣之）ざめるを。ほどのせばう。人げのすこしあるなどになぐさめられど。すごう（凄之）うたて（ワルクテ之）いざときここちする夜のさまなり。をかしうもあはれにもやうかへて心とまりぬべき（源の心のとまるべき事之）ありさまを。いとうもれ（末摘のさま之）すくよかにて何のはえなき（コトデ之　源の心とまらぬさま之）をぞ口をしうおぼす。からう（ヤットノ）じて明ぬる気色なれバ。かうし手づからあげ給ひて。まへの前栽の雪をみ給ふ。ふみあけたる（人の踏ミ開きたる事之）跡もなく。はるばるとあれわたりていみじうさび

ふりおて」ふりハそへていふことば之○をかしきほどの空」此おもしろき空をみよの心と之末摘のさまをみんとてかくのたまふ之○ほのぐらけれど」夜の明きそめぬ之○ゆきの光に」光ハ例の眼目之雪ハ下に照応し○はや出させ給へ」女房が末摘にいふ之○心うつくしきこそ」アイラシキこそ女ハよけれと之○ゐざり出給へり」ツロく出給ふ之、

四小ノ第三節

しりめハたゞならず」源しり目に末摘の方をよく見給ふさま之

しげなるに。ふりおてゆかんこともあはれにて（源ノ）をかしきほどのそらもみえよ。つきせぬ御心のへだてこそことわり（ナサケナイ）なけれ。とうらみ（末摘を之）聞え給ふ。まだほのぐらけれど雪の光に。いとどきよらにわかう（源のかたちさま之）みえ給ふを。老人（おい　年老たる女房までよろこびて源をみなすさま之）どもゑみさかえて見奉る。はや出させ給へ。あぢきな（ラチモナイ）し。心うつくしきこそなどをしへ聞ゆれバ。さすがに人のきこゆることをえいなび給はぬ御心（末摘の）ころにてとかうひきつくろひてゐざり出給へり」（四小段の第二節之。）

末摘のもとより源おもうして（源が末摘を之）雪ふりたる晴の状之。みぬやうにて。とのかた（源　外方）をながめたまへれど。しりめハたゞならず。いかにぞ。うち（アル）とけまさ

○うちとけまさりし」源いさゝかのなきほしもやまさると思ふなり○まづゐだけのをせなるよ」居長(ヰダケ)せなるさゝをせなるの尾背中之背のたかみジヤクミたるを悪しきさまをいふ○されバよ」源ハあやしと思ひしがされバよと○ふげんぼさち云」普賢菩薩のゝる象よのりのふ末摘の鼻の赤く先のたれこしまがりたるを戯ていふ之○雪はづかしく」上の照らさ之○しもがちなるおもやうハ大かた云く」下勝ハ額の方狭く頬の方廣き之大てん驚る

りけりいさゝかもあらぶられしからんとおぼえるもあさ(○地 メッタ)
ぢちなる(ニシヒタル)はんなりや。まづゐだけのたかうをせ
ながにみえ給ふに。さればよとむねつぶれぬ(驚くゝ之)。うち
つぎてあなかたは(満足ならぬ人をいふ)とみゆるものは。御はな(鼻)なりけり。
ふとめぞとまる(源のめもとまるくゝ之)。ふげんぼさちののりものとおぼ
ゆ。あさましう(アキレタホド)たかう(高)のびらか(延)にさきのかたす
こしたり(垂)ていろづき(赤くゝ之)たる事ことのほかにうたて(ミニクイ)
あり。いろ(末摘の白色之)は雪はづかしくしろうてさを(真青之)に。ひた(額)
ひつきこよなう(タグヒナク)はれ(腫)たるに。なほしもがちなる
おもやうは。大かたおどろおどろしうながきなるべし。

くほどやせき顔と之皆容貌のあしきをいふ之○きぬのうへまでみゆ」衣の上まで痩たるさま見ゆる之○何にのこりなう」源のみへかなしと謂るまゝをみつらんと之○めでたしと思ひきこゆる人々」葵上等之○をさゝ」専之、大てんなどいふと之○うちきのすそよさはりて」袿ハ上ようちかけて着る之一尺ぞあり長く引たる之

四小ノ弟四節

きたまへるものども云」男女ともその人の家

やせたまへること(痩つかうたる之)。いとほしげ(キノドクニ)にさらぼひて。かた(肩)のほどな
どは。いたげなる(痛サウナル体之)まで。きぬのうへまでみゆ。なにゝのこ
りなうみあらはしつらんと思ふものから。めづらし
きさまのしたればさすがに(末摘の)うちみやられ給ふ。
かしらつき(頭之)。かみ(髪)のかゝりはしも(ソレ)。うつくしげにめでた
しと思ひきこゆる人々にも。をさをさおとるまじう。
うちきのすそにたまりてひかれたるほど。一尺ばかり
りあまりたらんとみゆ『四小段の弟三節之源氏めでて末摘のやうすをよく見たる
ひそ(興さめ之)。きたまへるものどもをさへいひたつるも。
ものいひさがなき(クチヤカマシキ)やうなれども。むかし物語にも人の御さ

子を評するはまづ裝束のさまをいふぶかし。○ゆゑ〳〵しいろの」花色云紅紫の深色ハ禁色となづけ、浅きをゆるしたると云、制禁ハ及ばぬ誰も着るなり。○ふるきのこのはきぬ」貂裘（カハキ）と和名てんとゆふ獣の皮なり。○こぶめ」貂裘ハ上古ハほめたる物なれどいまハ不似合なり。○いとものさやされたり」原をうしくゆゑ。○このはなうてを」上の照君ハ匹君ハ迎まをべで嫁れていふさまなり。○なるごろもいそれのうびし」ものうしをきぬ狀なれども

さうぞくをこそいはまげいひ為めれゆゑ〳〵しいろのナサケナク。◎◎◎◎◎◎たるひとこのさねなるごろもなりなるうういどらこ。◎◎ほそきのふるくなりて黒ゆるこうちきうちきこのさねて。うゑぎよハふるきのこのはきぬいときうちよかうぞ〳〵しきをきのこり。こぶめのゆゑづきたるほさうぞくなれどなほこのやこのなる女のほよそひよはよげなうおどギヤウサンナろおどろおきこと。いとものさやされたりされどげよこのこのはなうはなうていさむのらまし〳〵とみゆるまの（末摘の）ほざ為なるを。（原ん）ろぐるし（キノドク）とえのふなよどろいそれ孫をびし。（原のあと）ろちとぢたるん

○引れさへくちとぢた（末摘のものいそぬよ）弟ってあさへと云へ。○例のもくさ」物いそぬとこ、三小段の四節の云よ照君を。○ひなびふるめうう」田舍ぶりて古代めくとこ、上のオ二節ハ照君ハ○きこきこと」故官とて、年少納云内記外記史るどを云、末摘の狀のとくしきをいふ。○いしたるう」つきるるくこ。○ぢろび」無目途こ行れとも云れぬ狀こ。○あさ日さ人の云こあきらけ、末摘表ハとけなぐら下のいのむ人ぼくるくを

ちもすへど。例のもくまもこころうんとぞうゆえ（末摘のさまこ）のふよいうをぢらひてくちおほひしのへるさへひいるびふるめのいいいいうとくしくぎもきくるんのぬり出たるぢもちおぼ色てさをぞようちるこのすへる（年少納云なりどこ公事ハ出る時ひぢをそうてぬりゆくなこ）けし。ぢしたるうもそぐろびしりいと泡しくあを（キノドクニ）れしていとぐいいそぎ出のふ。（原のこと）（末摘の形ぎくふるきこ）（原のもの上こ自らのこ）ほをこそめしる人まはうとうしぐ。おおひむつびのこ孫をんこそ泡いあるこちもぐれれゆゑ。（末摘のおとけぬこ）なきけしきるれぐつらうなどころつけて。（カコツケテこ）

（原）あさ日さすのきけさるひいとけるぢらなどの

いふ心なるべし。垂氷之○「うちゑむ」末摘の御笑ひのさまを云○「いとくちおもげ」口の重きを云、末摘の君の返事もなきをいふ、

四小ノ第四節

御車よせたる云々」是より末摘の屋しきのさまを云○よろづかくろへたる」夜ハ何事も隠るゝに荒たる所も大方かくれてあらんと云○松の雪のミ云々」上に雪の事多くにあるに照庭は、さて人ハさむげなるに松の雪のミ暖げに積りたると云○あの人々のいひし」雨夜物語にてる所あまされ

つらゝむすぼゝるらんとのたまへど。(末摘之)たゞむゝと
うちわらひていとくちおもげなるもいとほしけ
れば(源之)出たまひぬ』四小段の第四節之。源末摘の清装束(キノドク)のさまなどみたまひて、(倒レカヽレル状之)
御車よせたる中門(ちうもん)のいといたうゆがみよろぼひて。(源の車之)
よめ(夜目)にこそしるきながらもよろづかくろへた
ることおほかりけれ。いとあはれにさびしうあれま
どへるに。松の雪のみあたゝかげにふりつめる。
山里の心ちして。ものゝあはれなるをかの人々のいひし
むぐらのかどはかうやうなる所なりけんかし。げ
に心ぐるしくらうたげ(カハユラシキ)ならん人をこゝにすゑて(此やうな所に置て之)

たらん葎の門に云々」といひしを思出してのたまふ夕顔の巻に照るは○「思ふやうなる住みか」源の心よ思ひのまゝなる住居たる住居なれども末摘はその似合ぬ事○「我ならぬ人は云々」源みづから尓ならでは、末摘の容貌にては末とげじと思ふ也○「ちゝみこの末」橘の木の雪に埋たる也○「うるぞいずいじん」随身之○さとこぼるゝ雪」上に照庭之○なにたつすゑの」引歌明星に袖の名にしおふ末の松山のなみより波のこえ

うしろめたうこひしと思はゞや。(心にかゝればこひしきなどの事之)あるまじきもの(有まじきもの思ひの事之)
思ひはそれにまぎれなんかしと思ふやうなるす
みかにあはぬ御ありさまは。(末摘には似合ぬ之)とるべきかたなしと思ひ
ながらわれならぬ人は。ましてみしのびてんや。
わがかうてみなれぬるは。ちゝみこ(常陸の宮の事之)のうしろめたし(父ハナレズ)
とたぐへ(此姫にサシソヘテ)おきけんたましひ(魂)のしるべなめりと
ぞおぼさるゝ。うちたちばなの木のうづもれたる。み
ずいじんめしてはらはせ給ふ。うらやみがほに松の木
のおのれおきかへりて。さとこぼるゝ雪も名にたつす
ゑのと見ゆるなどを。いとふかゝらずとも。なだらかなる

ぬりぞなき」とあり、ふるき末の松山をおもひ出でゝつるさまなり○いはんかたなくとふかくらげなる」とは大かたの身にあるなどよみあひ志らん人もおれ」と末摘の云おもひなきをあげきのなふなり、

四ノ小ノ第六節

はしたなる」とは翁の子とも孫ともつかぬなり○ゆきにあひて」旧き衣なれば雪に映じて、さきて汚れて見ゆるなり○あやしきもの」は翁のさまに火をけのやうの物に火を入れてもてるなり○いとさくなかり」雪にて戸のあけたての難くなれる

かなる程にあひ志らはん人もがなと見給ふ。四小段の第五節之。末摘の方はあれたる庭前の雪景を叙せり。御車いづべきかどはまだあけざりければ。かぎのあづかりたづねいでたれば。おきなのいといみじきぞ出きたる。むすめにや。はしたなるおほきさの女のきぬは雪にあひてすゝけまどひ。さむしとおもへるけしきふかうて。あやしき物に火をたゞほのかに入れて。袖ぐゝみにもたり。おきなかどをえあけやらねば。よりてひきたすくる。いとかたくななり。御ともの人よりてぞあけつる。

さまなり○ふりにけるの頭」あさの袖は麻に朝をかけていふなり、こゝは雪の朝なれどもふりにけるかしらの雪といひて、式翁の袖よりも先を見る人の袖ぬれまさるとなり○幼きものは云々」細流に、秦中吟を引くとあるは無かるべし」上の第二節に風ふきあれておほとなぶらきえにけるをとゞむる人もなし」といひて、此みなこのきものは云こ」とあるは秦中吟に、夜深煙火盡霰雪白紛々幼者形不蔽老者體無温悲端与寒気併入

ふりにけるかしらの雪をみる人もおとらずぬらす朝の袖かな。をさなきものはかたちかくれず。とうちずしても。はなの色に出ていとさむしと見えつる御おもかげふとおもひいでられてほゝゑまれ給ふ。頭中将にこれをみせたらん時。いかなることをよそへいはん。つねにうかゞひくればいまみつけられなんと。すべなうおぼす。よのつねなるほどのことなるさまならば。おもひすててもやみぬべきを。さだかにみ給ひては。いとあはれにいとゞまめやかなるさまにつねにおと

鼻中辛げにそこなるべし。○よのつねなるほどの女房。源末摘の容貌尋常の人ならば、なほ持てもてなし、女房などよいひよりもるべけれども、その容貌のよろしからぬ、衣きよ、却て持なしぬべし。○ふるまひ、あてなり。上の第四節に見え。○おやうのまめやかなるもの。肉付のみつぎまで源氏うつしなれば、なるみ〳〵の人ならば、恥あり〳〵思ふべけれど、末摘は何とも思はぬを、源もいやはてくて、ちくなほ〳〵てたぐくもんと思ひ、〳〵これ末摘はいまの世女なるまづれのふふきれいいなきぬ絹綾綿ど。老女どものきるべきものくるぶひ。門あけ翁のおきるのためやすでおみしもおぼーやりてゐてまつり孫ふうやうれまめやかなるづうげるらぬを。のうしろまてちぐくまん。別段に殺多の為をけまゆるべきにぶもあるんやをくさるるこのうしろまてちぐくまん。とおもはしとてさはしるさるらぬうちとけ。ふとこ

方此家人までも多困るを知をのひて。上下の人こそれ〳〵よ物のふ物。見近江四小段とし。此段は源氏の夫。姫まは末摘をいとのるる人まのとゆのうなつうく。懸想一のひーごやう〳〵ゆけばいふく〳〵ゆとうまるるあきれのくれど。此方の人くれまつしきさまを表とおぼし。うつふさるほうるまてもつひよろ持なるらぬさまよ

『四小段の第六節。源門をする翁のさまを見のひて。末摘の

十八号十

バ大やうなるさまを、

五小ノ第一節

あの京塚の京〳〵京塚此巻の巻名。あれ燈火まて側目まるべ京の容ものろうり志ぶ。今末摘の容の服りよろろけれど、京を思ふ。○却とるべき人なりやは末摘は京塚よ劣るほどならねど、もてなしよのならぬ方よ劣るとも。○げよふまもろ〳〵面夜物侍よ分はたぐふよもよらぬ」といふるをうけてげまといふ。

五小ノ第二節

ふ〳〵もくれぬ」源十八第の年の春めるる。○かきなせるハ。源の京塚のうちとけに仁愛のほどを思せるまり。おの京塚のうちとけいふ〳〵しいしひのそばめいいとろふりーまるちざ海るれどもてなしよのくされてくちをーうハあらぎりきこう。おとるべきほどの人なりやハげよ志れまもよらぬつらざ成人りんでせのるぐらのよ。ねーげなるふーをまけてやきまーのれと物のをりどよハおぼーいい。五小段の第一節。源物のをりごとまて。とーもくれぬ月の中。源十九才の年のまとおぼふよおをーまはよ。大蒲の命婦系れりぽけづりぐーなどよはけさうーげまをぢるうんやをきものくさをおよのひたそ

内の所々のゐる西内裏の宿直所に○ほけづ
やぐーなどよ八ろ〳〵」源氏髪けづりなどよ
命婦をめして、題恵だ
つとなく召使のすゆも
のゝやうり殺となどい
ひのすゆに○ひぬく
〳〵」事をすげてなる
に、俗イヂワルクに○
いのぐを」いのぐハ色
ミ侍らんとに○うづ
ゐちのうまに八ろ〳〵」
命婦ゐの上の懸な
どをちば、なれど侍ー
くとも、先こそ侍らん
めとに○えんなり」風
流めくに○のの宮」
光隆の宮に市橋の方
よりに○すを」況に

ふれなどして（ダン）つゐひなら〳〵のへれだめ〳〵ふ
きとまるもきこ（源氏中上るとに）ゆべきことあるをりハまうのぼり
りあやしきことの侍をきこえさせざらんもひ（命婦に）
おゝしう思ひのへうづらひて。とほく（微笑）ゐこそゆ
（源氏）ぬやらぬを。（源氏）なまざ侍のとぞ。あるはつむこと
あゝど。とるん思ふとのへば。いのぐを。（命婦に）ゐ
のう宮へなゐ。こくとも。まゐこそハこれをいとゆ
（言葉に）ぬさせよくくなん。といふことこめこれだ。（源氏）宮の
えんなりとよくみのふのやうに侍るに（命婦に）ふこ
とてとりいでたり。（源氏）てこれハとりあくまべき

○絢つぶ」命婦恥あ
しと思ふに○ミちの
くまぶみ」檀紙に陸奥
よりまきはめしよ
に○いとよゝ〳〵」書
ゆゝるに、女のをさ
のゝ志にこうよ和き
たるいろきいます
めに○のら衣の衣」
衣のよせして、きみぶ
といふまに着をかけ
たり、そぼちハ濡るく
ことに、源氏涙をる
装束の古くて色のあ
れるを、泪ぬめれて
かく色のうつろへる
さまよいひるーたり、
さハはらけー○えと
りひきこめ侍らんも」
命婦ぶ方よりあ玉侍

ことのはとて。とりのふる絢つぶる。ちのくまぶみ
のあり（厚肥）ごと。るよ匂ひだりハふのうちめ弱へ
りいとようかきおほせり。（あるよくこうきさりとに）あるも
のら（志摘）衣きみぶんのつらけれバ被（こうむと）をくぞそ
ぼちつゝ。（源はあハ侍ぬとぞと考へる）ゐこそろえず。うちのくぶきまへるつ
つ（裏）よころも（管）ぶこれおもり（オモ〳〵シゲニ）のにこぶん。（古風なる）なるうちお
きておーなる。（命婦に）これをいとでのは。（キノドクニ）ふらいくく
思ひのへざらん。（正月元日の源の注装束とに）されどついちれ侍よそひとて。
（懸と進ぜられしに）ざと侍めるを。（ツキモナクハ）ふたるうハえのへー侍らぶえと
りひきこめ侍らんも人の（志摘ミ）ふんこのひ侍べけれを。

らんもえ○袖まき干さん」引ごえ「万よ淡雪ハふるふりそふぬの袖まきほさん人もあらなくよ」ゆまきほすハ枕よして暖めて乾すそえ言ハ源のほ袖ぬるゝとを謹ほす人も無よ。末摘の志ハ嬉しきと態とものふえ○これ、こそハ手づからの」源前の歌ぬほきての歌ハ末摘よハあらじと思ひしたる歌よ、是こそ末摘の手づからのなるらめとえ○侍従こそ」侍従などとり直さんと思ゆるがえ○ふでの志りとる人」やくしき歌を直

御らんぜさせてこそはときこゆれバ。引こめられなんハからかりなまし。袖まき干さん人もなきみに。いとうれしき心ざしにこそハとのたまひてことにものゝいはれたまはず。さてもあさましのくちつきや。これこそハ手づからの御ことのかぎりなめれ。侍従こそとりなほすべかめれ。またふでのしりとるはかせぞなかるべきといふかひなくおぼさる。心をつくしてよみ出たまへらんほどをおぼすに。いともかしこき御ことゝいふべかりけりと。ほゝゑみて見たまふを。命婦おもてあかみて見たてま

ハ博士のなきことハあるまじきとえ○いまやう色」紅梅のこき色え○えゆるすまじく」色の濃くして禁色よ似たるえ○うら〳〵ひとしう」裏表こき色之○あさまし」驚歎之、與さめてえ○そばめ」側目え○なつかしきの迩」紅の花ハ末よりさけバ、やがて末より摘む故よ末摘花といふえ、源氏後悔の独言なるべしと細流よありハ色といふより袖よとうけたるまで、言外之○花のとがめ」源より花のとがめあるハ、末摘の鼻よ子細あらん

る。いまやう色のえゆるすまじくつやなうふるめきたるなほしのうらうへひとしうこまやかなる。いとなほ〳〵しうつま〴〵ぞ見えたる。あさましとおぼすに此ふみをひろげながらはしに手ならひすさびたまふをそばめに見れば。

なつかしき色ともなしになにゝこのすゑつむ花を袖にふれけん。いろこき花とみしかども。などかきけがしたまふ。花のとがめを猶あるやうあらんとおもひあはするをり〳〵の月かげなどをいとほしき物からをかしうおもひなりぬ。

とゝ○くれるゐのの道ひとをれ一入と同じくくるしく腐らしくゝ三ハ紅のひとをれ衣を色うしくゝとて、一向まろろゝと名をたてるゐるちよるるべしとゝ命婦い末摘のかうどゝて云ゝ○いるで」奥のまるゝぬゝ、を先ゐざといふとまて、平凡のとゝ○人の風どゝ云」末摘の多ゐを笑てきのどくとゝ、命婦の方より付て源遠方しのふゝ○とりかくさんや」源殿丸をあさまし」と思ひて人よみられドとゝ○やをゝおりぬそゐ〳〵

命婦

くれるゐのひとをれごろもうをくゝともひらすらくゝしくなをしルしゐてぞいんぐるしのようやといとゝうるれて訓ひとりごろを言よきまいあらぬど。かうやうのこんなでまぐるまあゝまーあぞ。とまへまをくゝちをー。人の風どのんぐるーきよ名ザンネンゝくちなんいさをぞなり。人ゝ系れぞ。とりあくさんやゝくるゐるまぐるいゝ人のまるゐるまゝやあゝんとうちうめきのるふ。なるまゝゐらんぎさせつらんふさへこゝろるきやうよ。といとをづゝーくてやをらありぬ」五小段の第二節ゝ末摘より出装束より出家。源て遊せられしを源あきれてゝ人のゝ人独ゝ。

命婦ゝ迷惑してくるきゝ　命婦ゝ後悔をゝゝ　分際ゝ　末摘の　独言　源ゐゝ　源ゐ

十八号十三

前を退出をゝゝ、

五小ノ第三節

だんだん」源大盤ふゝ、清涼殿まあり○ふ」やゝこやといふまおれド、これまゝと人を呼をゝ○ゐゐくらあの風」風伝ふまたくらあのふのとゝ云」たくらめハ華ゝ、華ハ赤き色まゝ」ふハ梅をいふゝ○みのゝの山のをゝとめ」三笠山春日明神ハ奈陸まり出るひ〳〵神社ゝ、奈陸宮の末摘といふとゝ、さて鼻赤きを梅のごくといふまゝてうゝひめふゝ○つゝ志りうゝ」一口ごうゝふとゝ○ゐ

源氏物語講義　末摘花　三十三

禁中　命婦ゝ　源の君

まゝの月うへよさゝふらへ。だんだん源のまゝーのぞきのひてくふや。はるのこのりとあやゝくんだみをぐさるくゝとそなげるへり。女房達伝事をらんとゆこのーがるゐくらめの花の色ゝどみのゝの山のをゝとめをバをてくゝとうひをゝびて出るひぬる弦。

甚笑ゝ　命婦ゝ

ゐ命婦ハいとをこのーと思ふこゝろをらぬ人ぐゝ。なぞ世猶ゐゝゝまゝとゝやゝぎめあへり。あらぐゝ宮きゐの色よこんぬりこめる花の色あひやみ色つらん。世つゝ志りうゝこのいとをゝ世といへだ。あれのちなる世ゝとのれ。このるゐはゐほへるゐるもなゝのめ

式ゝの方ゝまて赤き色をこいぬりとのゝこもいゝ　命婦ゝ　女房達ゝ

ほへるなるべし」鼻赤き人なるべしと也○左近の命婦、肥後の采女」二人ハ鼻赤の女房と見えたり○心もえでいひしろふ」何ごゝろもなくぬ女房達いひあふ也、

五小ノ第四節

あはぬよをへだつる」是ハ末摘より贈りたまへる衣のことにてよみたまへるを、みもしみよとやハ衣もえん人もえよとの意也、一そのこゝろハ、あはぬよを隔つる衣のあるうへにいとゞ是を重ねて衣もえん人も見もえよとの思召なるやと也○えびぞめのおりもの」蒲萄色の織

り。左近(さこん)の命婦。ひごのうねめやまじらひつらん。など心もえでいひしろふ。「五小段の第三節之源大盤所まで飲之」て末摘のことを命婦よりのたまふを聞え。（命婦源の御返事をとえ）御かへりたてまつりたれど。（末摘の方之）こゝやまは女だちつどひてみめでけり。

（源）あはぬよをへだつる中のころもでにかさねていとゞみもしみよとや。志ろきかみにすてかい（捨書之ナゲヤリ）たまへるしもぞ。中々をかしげなる。つごもりの日（十二月晦日之）ゆふつかた。かの（末摘よりの之）御衣ばこに。御れう（料）とて。人のたてまつれる御ぞひとぐ（一具）。えびぞめのおりものゝ御ぞ。又やまぶき（山吹）かなにぞ。いろいろみえて。命婦ぞ（命婦取次てこ之）たてまつりし。

物の御衣也○かれをさくれなゐの」此方よりまゐれる」八紅のこき色まてよかりし御衣也此方のハおもとるきまじと末摘方の年よりたる女房ども批判したる也○おぼろけならで」俗ニ大テイデナク也、末摘ハおろそかならぬよみのまへたる歌なれバ、かきとめて見給ふ状也、

五小ノ第五節

をとこだうか」男踏歌也年始の祝言の歌うたひて舞ふ也、聖武の御時より始れり○さびしき所の」源末摘のおこそあはれなるおほ

あひをさうしとやそのひろんと思ひしらるれど。（末摘方の人々の詞之）かれはた。くれなゐのおもおもしかりしをや。さりともきえじと（老タル女房之）ねび人どもはさだむる。此御うたもこれよりのは。ことわりきこえて。したゝか（シツカリシテ）にこそあれ。御かへりは。たゞをかし（オモシロキ）きかたにこそ（アレ）などくちぐちにいふ。（末摘之）ひめぎみもおぼろけならでしいでたまへるわざなれば。ものにかきつけておきたまへりけり「五小段の第四節之源より末摘へ御返る[illegible]贈りのふ状なり。（源十九才の正月之）ついたちのほどすぎて。ことしをとこだうかあるべければ。例のところどころ（踏哥の人々みなるべし）あそびのゝしりたまふに。物さわがしけれど。（末摘の家之）さびしきところのあはれ

しるしゑ○なぬかの日は七日の節会（七日節会）の日はせちゑ（節会）とは日ごとあり○ふしておそくたり夜更て源氏物語のうへ（源氏物語の上）ほそもとゑ○例のありさま（例のありさま）末摘いつものさまなりけり○ゑをやぎ（姉妹）源もきこしをすめきのふゑ○ひきゑゑらん（ひきゑゑらん）時下ま照ゑ（照ゑ）源氏物語のうたちをゑ（うたちをゑ）直に時かあらばとゑ（時かあらばとゑ）○やをそらひるをて（そらひるをて）この（この）ひたるゑ（ひたるゑ）ゑ陸の宮の荒たる秋ゑ

よおぼしやらるれだ。（四月七日）なぬかの日は七日せちゑ（節会）をてく。
（帝の御前）ゑ
ゑよりてほぜんより（帝の御前）まるまでのひるをほとの
（桐壺）ゑ
ゑどころよ。やをてとりのひぬるやうまて。
（ソノマヽ）
ようしておそくしう。例のありさまよりはけ
（色気ツキタルゑ）
をひうちそよめきよりいう。ゑもそこしさ
（メダチテ）
をやぎのゑる気をもてつけのゑう。いのゑぞ
（モテナシ工フゑ）
あらゑめてひきゑゑらん時とぞおぼしつゞ
けらるゑ。日さしいづるほどよ。やをらひるをて
いでゑまふ。ゑんぞのつまどをあけられだ。
（廊の家根ゑ）
むのひるるらうのうへゑ（向）ゑくあだれたゑび。

○日のあ（云）日暮のたぐちよさ入れるゑ荒たるさまさゑあぐし○雪をとゑ云ゑ上の四段才二節ま照ゑ○ほれいでたる秋出てみゑるとゑ○おひるほう末摘の顔の生なほりるいんをゑ出さらん時はうれしのんとゑ上ひきゑのへたらん時とあるよ照ゑ○ひんぐきの髪茎ゑ源脇息よかくりておいせぶ鏡臺よりて髪のそくけゑるをつくろひるゑ○ゑらくしげ唐匣ゑ○かくげのたこ撥上函ゑいづ

日のほのぼのほどをくさ入りて雪をこいいたるひいいよいとけざやのようえいれらるほなどなるをみいぐ（源ヨ）てをこさいでく。おさいらふ（側）ふ（卧）ゑまくるこのらつき（末摘の髪のさまゑ）こぼれいでゑる秋。いとめでゑ。おひいいほりをえいでゑいらん時。とおぼされてこのうしひきあけのへう。いとほ（キノド）しこのアヒ（クデアリシ）ものごろよ。あけもをそ（格子をゑ）ゑをおしよせてうちのけてほびんぐきのあどけなきをつくろひ給ふ。（メツサウニ◎◎◎◎）ようなるふるあきたるきやうだん。のらくしげかくげのたこなどとりいでたさ

きも髪あげの道具と
○さきごのよをとこの
ゐるさま」故実の所物
なるべし○女の所さ
うぞくなり」源より
なるべし所装束を未
摘の著のべれば色けつ
きてえゆるとと○け
うある紋つきて云」
奥ある紋付てあるま
ゝなるべし装束
まゝ似たりと源のえのふ
と○ずゝるくものゝ
引あべ、古今よあら
ゐの年立のべるあた
りまゝるくものを
栄の参」待るく栄の
声より也末摘のうち
とけたる参をゆき
たきとと○さひづる

きごのよをとこの所ゆるさへ（スコシバカリ）あるゆ。（シヤレテ）ぎれて
をこのしとえんのるふ。女の所さうぞくそふはよげき
（オモシロシ）
るべし○女の所さ（略る源より事なし箱の注さと）うぞくなり」（きもく）源より
なるべし所装束を未摘の著のべれば色けつきてえゆるとと○けうある紋つきて云」奥ある紋付てあるまゝなるべし装束まゝ似たりと源のえのふと○ずゝるくものゝ引あべ、古今よあらゐの年立のべるあたりまゝるくものを栄の参」待るく栄の声より也末摘のうちとけたる参をゆきたきとと○さひづる

春は」引あべ、古今より百
ゆるさひづる春は物
ゝまゝあゝるまれども
ゆるぞふりゆく」末摘の
年ふりまさりたると
云ゝと○歌のことぞえ
る」引あべ、河海より忘れ
ては歌のことぞ思ふ思
ひきやと雪ふゝりけ
て矢をえんとは」とあ
り思ふをえんと云のべ
たるまゝや、さはたまさ
のなるをいふなり、

五小ノ第六節

むもんのさくらのほそ
なるぶ」無文の桜をの
べ、ほそなるぶは貴女は
著まる物べ○初ぞ矢
の所なるごり云」ぶち上
は祖母の尼矢の所服

していでるふを。（末摘の）
ちおほひのそそ（覆）（側）（目）あより。粧のの末つむ（赤き）（鼻）れいとま
ほひやとのよさ（ハナヤカ）しいでたりこぐるのとぞや。（源ハ）とお
ぼさる」五小段の第五節と源の月七るの歌。末摘をと
（源ハ）ふらひるひて。始めて物ぞうきるふさまるう。
二条の院よおそ（源ハ）ゆりるひそと
くしきこのこおひ（かるまりとのふさと少女と）ひまそくれるゐをかうなつあし
きものりけり。（源ハ）とえゆるまむもんのさくらの
ほそなるぶ。なるよく（シナヤカニ）あよきれして。なるこく（少年）ゆ
ゆ（なれバと）るくてものしのふさ（カハユラシ）いこぐうらうた
し。こぐんのおぼ（小山の尼矢と）ぐ云の所なごりまて。そぐろめも

の名殊ふて、いまゝ歯黒めも志のふぬゑ○
ゆめのけさやうは歯黒めの後先の眉まを
りたるとゑ○かうう
き世をゑゝ」さおぐ
夕良末指すどゝふを
ゝ」のふとゑ○かく
ふぐるゝき物を四ほ
の上のめくうつくゝく
ふ苦ゝき物をえてあ
らでとゑ○おさび」ス
キキョウゝ又をぐさ
みといふとゑ○れれ
よべまをつけて」上の
赤き鼻といふを題名
に○かゝとのきて也
末指の顔を画まかき
てゆゑ○ゝ歯うき見
むうきとらふとゑ

すぐゝこのうけるを。歯黒をど志のふゝれだゝ
西のけさやうはなりたるゆうゝくゝうきよら
なり。源の叡念ゝ
ゑゝはこのらるどゝ。かううき世をゝあゝ見扱
のふらん。かくゝこゝろぐるゝきものをゆゝてゆさ
らでゝとゆぼゝつゝ。きんのゆゝとゆよゝ雛遊ゝ
しのふ。猪ゆるどゝのきていろどり猪ふゝよろゝゝよを
こゝうゝをきびちらゝ猪ひゝりゝられ源ゝゆゝきそへ
ゆゆふゝ。源髪ゆき女をかきのふゝ末指のまゝぐゝゝ
よゝべまをつけて源ゝ紅ゝ。源ゆ彩のゝ
きゝゆゝ。源ゆ彩のゝ
ゝりゝぶゆゝ臺鏡ゝゝぶんゝゝゝ

○式あゝぶるをかき
つけ」源ゆ鼻よ紅粉
を付ゝゝゝ上ゝ赤き鼻
のとゆゝゝゝる題名ゝ○
ゆゝれらんゝかくゝの
めき満足の新でゆ赤
きゆのゆゝりあらん
ゝゝ○ゆゝろぶ」まゝゝと
ハゝゆと訳ゝむとバ
ゝ夫ゝうゝうりて自
ゆのとゝゝゝゝ○ゝ
たて」このゝゝくゝとふ
ゝゝゝ夫ゝうゝうりて
あゝゝきゝゝゝゝゝ○
そゝらのごひ」ゝぶゝと
拭ふゆゆぬをゆゝるゝと
ゝ○ゝうゝるきゝゝゝ
無角の新れゝゝゝゝ
○いゝゝまめやゝゝ」甚
信実らゝゝゝ○へゝゝち

きゝるぶ。いゝきゝゝらなる猪ゝんのひてゝ。ゆづのゝら
ゝゝあゝぶゝゝゝゝをゝゝゝきゝつけ。彩色シテゝ
かくゝよきこのほゝゝよゝさてゆゝれらんゝゝゝぐゝゝゝゆ
るべゝりけり。妹ゝぎゝゝゝんゝゝゝゝゝ

うぶやうよ」是ハ平貞文の故事をいふ、貞文字を平仲といふ宇治大納言物語云、貞文ある女のもとまゐりて、泣まどをして硯の水をふところよ指て目をあらぬらしけるを、女ゐねて墨をとりて、入てうけるを、ちで又ぬらしけれバ、女鏡をえせてよめる

よとそつらさハえぶみをれどゑ人よをつくゐ屋のけしきよ」とあり○ゐもとあき中まろ」いつとと花をまろ〻○けしきばみ」キモチヲミセテ〻○同くゐ〻咲そめたる

してよりてくのごひのゑ。へれちうぶやうよいろどりそへのふるゑ。あのくらんハあへあん（コラ）とらえふれのふさ海いとをみしきいもせと（妹背の中）ゑ巨のゑ〻りゐ

ゐいとうらくゐのなるゑ。いつしのとかをこうゑれる梢どもの。ハゐもとあき中まろ。梅ハけしきだ〻。ゐ〻。ゐく〻ゐこゐ。とうこきてこゐ。（コトニミユル）をしゐ

くしのゐとれ紅梅（こうばい）いとと（甚）くさく花ゐそ。いろづきまろう。

くれなゐのをれぞあやなくうとまるゐ梅の立枝をゐりうれどいぐやとあいをくう（アハセナリ自分ノミ）

（ゐ也上寄ゐ）

十九号三

ちうめうれのゐふ。（地）ゐるひとぐのをゐぐいゐ

ゐをけ中」と遊びのゐふ拙ゐ。こゐ平仲のゐをいふ。例の餘波ゐ是迫を五小段とゐ。ゐ段ゐ首ゐ源氏の君ゐ五小段の才ゐ節ゐ源二条院ゐて是上ゐ下心をゐめゐゐゐ。尾ゐ是上と遊びのゐふゐ。赤鼻の梅きゐ

ゐ。いゐ〻〻ゐ梅をうゐゐみのゐふゐ。さて梅ゐこのり蝶ひゐ

ゐまひうゐゐみのゐふゐ人ゐそゐ。さをゐゐ拙のゐぬハいゐとありがゐき源氏のゐんゐ。ゐりゐ。又結尾ゐ梅ゐ拙ゐ人ゐ思ゐ思ゐ。ゐ人ゐ思ゐ思ゐ。ゐ人ゐ思ゐ思ゐ。

狀〻○かゝる人〻のを多くゝ見ては未稿なりどのゆ未ハいとのゝなることなるらんと地より神ドたる河を以て結べるゝ、

くゝしくいえんとは。於十四ゝ。

末摘花の巻終